
季球妖物語

柊らみ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季球妖物語

【Nコード】

N3032B

【作者名】

柊らみ子

【あらすじ】

——妖とは、人の心が映し出すもの。和風な島国季球を舞台にした、物書きの青年種田草雲と、被い屋を生業とする兄弟の織り成す、少し不思議で少し哀しい物語。中編連作。第一幕「桜鬼」完結済み。登場人物の日常を描いた短編もあります。第二幕「夢織人」連載開始。

第一幕／桜鬼・序章

ヒラヒラ、ヒラリ。

舞い散る踊る。

狂い咲きの血桜と、

季節外れの雪化粧。

ヒラヒラ、ヒラリ――

「……鬼イ？」

半信半疑の声だった。あからさまに、「お前、それ本当か？」という響きを伴っている。たねだそうん種田草雲は、少々興奮気味に首を縦に振った。

「当たり前ですよ！ 私が嘘を言った事など、今まで一度も無かったですでしょう？」

「今まではな。でも、これからはあるかもしれねエだろ」

そう、目の前の人物は素っ気無い。まあ、彼の事だから、タダ単

に面倒なんでしょうね、と考えると草雲は苦笑をもらした。それが分かる程には、草雲は彼のこういった態度を何度も目の当たりにして来ている。目の前の赤毛の青年が、かなりの面倒臭がりであるという事に気付く程には。

「それに、どーせタダ働きだろ、今度も」

「そりゃあ、私は雷封さん達とは違って、依頼としてお話を聞いているわけではありませんからね。ただ、気になる話があったから、こうして頼みに来ているだけで」

ふむ、と雷封と呼ばれた青年が呟き、唐突に座り直した。彼の黒い法衣の胸元に下げられた鈴が揺れ、ちりと澄んだ音を響かせる。「じゃ、依頼人は草雲先生だって訳か？ちゃんと報酬を払ってくれるなら、受けてやらないでもないぜ？」

真顔で言われ、一瞬答えに詰まった。自慢ではないが、財布の中身は木枯らしが吹き荒れてしまいそんな状態である。どう考えても、雷封の言っている事を承諾するのは無理な相談だった。

「……それは……」

「それは？」

「お話を聞かせて頂きましょうか？」

唐突に、草雲の後ろから掛かった穏やかな声。その声の主を認めて、身体を乗り出していた雷封は、またやる気無さげにそっぽを向いた。それとは対照的に、草雲の方はほっとしたように声の主に話し掛ける。

「ああ、霜雪さん。聞いて下さいますか？」

「ええ。貴方の持つてくるお話は結構興味があるものがありますし。もちろん……」

とたとたと部屋の中を進み、雷封の隣までやって来ると裾を払って腰を降ろす。

「兄さんにも、お手伝いさせますよ」

にこやかに言っているのに、何処か逆らえない威圧感がある。尤も、それは言われた雷封にだけ、感じたものなのかもしれない。

が。彼にとって、この血の繋がらない弟は唯一と言っても過言では無い程自分が口で勝てない相手であると認識しているから、余計なのかもしれない。可愛い顔をしている割りに、言う事はキツイのだ。「お前……よくいつもいつもタダ働きする気になるよなア……」

「たたく、財布の中身を確認してから話聞けってんだ、とぶつぶつ言っている雷封に、霜雪は盛大にため息をついて見せた。

「兄さんのお財布の中身がすっからかんなのは、私の所為じゃありませんよ。普通に使っていれば不自由しないぐらいの稼ぎはしっかりとしているじゃありませんか」

「しつかり、だア？」

どつこがしつかりなんだよ、と半ば呆れたような声で反論をする。しかし、この弟が自分の反論程度で言い包められるような人間では無いという事が分かりきっているため、彼のそれはほとんど形的にやっているだけに過ぎなかった。何となく、癪だったから。

さつくりとそんな雷封を綺麗に無視して、霜雪は草雲に話をするよう促した。

「ここから少し行った所に、赤月しやくづきという村があるのをご存知ですか？」

草雲の話は、こういった問い掛けから始まった。その問い掛けに對し、霜雪は少しだけ小首を傾げて考えているような表情をしたが、すぐに頷いた。

「ええ、名前ぐらいは」

「その村に、鬼が出ると言っんです。何でも、厄介な鬼で、人を食いかねない、と。で、そんな被害が出る前に、退治して欲しいと頼まれたのですよ」

「頼まれたア？ 先生、あんた物書きだろ？ 一体いつから退治屋に転職したんだよ」

聞いていない振りをしながらきつちり聞いていたらしい。雷封のいじわるな質問に、草雲はしどろもどろになりながら答えた。

「いえ、その……つてがあると……つい言ってしまいました」

確かに草雲はただの物書きである。雷封と霜雪の兄弟のように、不思議な事件を引き受けて調べるなどという事はやろうと思っても出来ない相談なのだ。

その答えを期待していたのだろう。雷封は両手を広げて肩を竦め、あーあ、とわざとらしく大きなため息をついて見せた。

「何だよ……。それじゃア、最初っから俺達をアテにしてたんじゃねエか」

草雲が言葉に詰まったのを良い事に、つまりさ、と赤毛の青年は言葉を続ける。彼に唯一待ったをかける事が出来る彼の弟も黙っているという事は、多分、兄の言う事にも一理あると思ったからなのだろう。「最初っから俺達をアテにしてたんじゃねエか」という、その台詞に。

「それって、先生はもう話を受けちまつてるって事か？」

選択権はねエって事か？ と、彼は言葉を置き換えた。

草雲は、小さくなりながら「ええ、まあ……」と蚊の泣くような声で返事を返す。

「だって……断れるような状況じゃ、無かったですし……」

もごもごとした言い訳。兄と弟は一瞬顔を見合わせ、同時に肩を竦めた。

「あのよ……。一つ聞きたいんだが、先生に報酬は入るのか？ それなら、鬼退治ぐらいすばーんと引き受けてやっても良いぜ？」

雷封の言葉に、草雲の顔がぱあっと明るくなった。誰がどう見ても、その表情だけで充分彼の言葉に対する答えになっていると分かる。

草雲はダメ押しのようにな、こくこくと一生懸命頷いた。

「ええ、それは、もちろん。受けて下さるのなら、六：四で貴方達に報酬をお渡し出来ますが……？」

「……さっきはそんな事、一言も言わなかったクセによ。隠してたから、七：三、だな」

「そんなあゝ！ わ、私だってかつかつなんですよ！？」

「へつ。知るかそんなん。俺よかマシだろうが」

「無意味に胸を張らないでくださいよっ！」

思わず叫んで、救いの眼差しを霜雪に向けてみる。彼の綺麗な紫の瞳は、そんな草雲の視線を真正面から受け止め、にっこりと笑いかけた。

「……そうですね……。七：三では、割り切れません。八：二で手を打ちましょうか」

「……え」

あまりにも素直な笑顔でさっさとこういう事を言う。それこそ、雷封が弟に勝てないと思う最大の理由なのだった。相手を油断させておいてぐさつと鋭い一言を放つという攻撃方法は、あまりにストレートな彼には持ち得ないものだったから。

ほとんど泣き出しそうな顔で固まっている草雲と、にこやかな、まるで邪気の欠片すら感じられない優しい笑みを浮かべている霜雪を見比べながら、自分の弟の手腕をうむ、流石だ、などと今更ながらに考えてみたり。

「じゃ、決まり——だな？」

にやりと、してやったりとした顔をして言った雷封の台詞に、もうどうにでもなれ、と言ったような気持ちで頷くしかない草雲だった。

桜鬼・其の一

歩き出してからどれだけ時間が経ったのだろう。そろそろ腹減ってきたよなー、などと思いながら雷封は一人、山の中の小道を歩いていた。

すでに日は高い。彼がこの山に入ったのはまだ太陽が顔を出した辺りの時間であつたので、もうかなりの時間が経過しているだろう事は容易に想像出来る。全く、何だって俺がこんな損な役回りしなくちゃいけねんだよ、と彼は誰にとも無く毒づいた。足元に落ちている枯れ枝が、ぱきんと乾いた音を立てる。

「……鬼、ねエ……」

そう、不機嫌な声で呟くと、彼は唐突に足を止めた。懷に手を入れ、中から二枚の札を取り出してかなり適当な感じで印を組むと、投げ遣りに一言「式、召喚」と唱え、札をぱつと空中に散らせる。

そんな、いかにも面倒くさそうに行われた術だったが、散らせた二枚の札は地面に落ちる事無くその姿を二羽の梟へと変え、今度は自分の力で空に舞い上がった。梟は頭上で一度旋回した後、それぞれ反対の方向へと飛び去って行く。

それを確認し、雷封は大きく伸びをすると近くの木に背中を預け、無造作に座り込んだ。そして、今度は大きく欠伸をする。

………つたくよ………。

なアーにが「人探しは、兄さんの能力の方が適してますから」、だ。

にこやかにそう言いきつた弟の顔が思い出される。今頃、あいつと物書きの先生は詳細を聞きながら美味しい飯でも食ってるんだろうなと勝手な想像を巡らせた。

霜雪のヤツ、異様に人受けが良いからな。

「………本性を知らねエってのは、ほんッとおめでたい事だよねエ」
ぶつぶつ言っている雷封を遠めに見ながら、小さな少年が足早に

通り過ぎて行く。そりゃあ、こんな獣道然とした細い道の端に座り込み、ぶつぶつと何かを呟いている人間なんぞと係わり合いになりたくないと思うのが普通の人間の思考というものだろう。加えて、雷封の纏っている着物は黒い法衣であるし、傍らには変わった形をした錫杖まで置いてある。

さらに付け加えるなら、雷封は目付きもあまりよろしく無かったりするのだし。

つまり、この雷封という人物は、どこからどうみても胡散臭く見えてしまう人物なのだ。ただでさえそう見えるというのに、道端で一人座り込んでぶつぶつ言っているのだから、余計にそう見えてしまう。

人受けが良い、と彼に言われている霜雪と血が繋がっていないと言つて、思わず頷かれたりするのにもよくある事だった。それだけ、弟とは見た目から漂わせている雰囲気まで、全てが似つかない。

まア確かに……。

俺の方が、こういった事は向いてるんだけどよ。

そう自覚しているだけに、ため息が出た。

……がさり。

ため息の最中、そんな音が聞こえたような気がして、彼はため息を途中で噛み殺した。中々に器用な芸当だが、これもまた、あの弟と付き合っていく上では重要な技なのである。霜雪は、妙なところで異様に鋭かったりするのだ。

雷封が視線を巡らせた先に立っていたのは、小さな少女だった。

まだ、十かそこらだろう。若草色の着物を着たその少女は、雷封を感情の薄い深緑の瞳で見下ろしている。

「あたいに、何か用？」

「……あ？」

硬い声で言った少女の言葉が、理解出来なかった。意味が分からず、ぱかんと間の抜けた表情になった雷封に構う事の無いまま、少女は言葉を続ける。

「あんた、被い屋でしょ」

「……まア……そんなモンだけだよ……？」

それぐらいは、彼の法衣と錫杖を見たら誰だって想像が付く。だが、だからと言って、こんなガキに因縁吹っかけられる言われはねエぞ、と雷封は心の中で呟いた。

「鬼、探してんでしょ」

その台詞は、呆れていると言ったような響きを持っていた。何となく、馬鹿にされているような気がしてかちんと来る。

「だったら何だってんだ？お前にや関係ねエだろ」

居心地が悪くなり、錫杖を持って立ち上がる。少女に背を向け、さっさと元来た道を戻り始めた。

「……あんた、ホントに被い屋？」

「——ッ——」

ザンツ——

雷封の頭スレスレに、少女が薙いだ巨大な刀が通り過ぎて行く。嫌な予感がして咄嗟に頭を引っ込めたわけだったが、どうやらその予感は当たったわけだ。どこから取り出したのか——というよりもまず、その刀は少女の身体よりも余裕で大きい。例え、大の大人が持ったとしても振り回すのは困難だろうと思えた。

そんな刀を少女は軽々と振り回し、間発を入れずにもう一度振り下ろして来る。体重を乗せた容赦の無い攻撃を錫杖で受け止め、初めて雷封は少女の顔をまともに見……そして短く息を呑んだ。

——耳の先端が、尖っている。

白い髪の間隙から覗くその耳の形は、明らかに人のそれとは異なっていた。

「……お前……」

ぎしつと錫杖が軋んだ音を上げる。力押しでは敵わない。腕力が無い方だとは思っていないが、あまりにも得物の大きさが違い過ぎるのだ。このままでは、錫杖の方が持たないだろう。そう判断し、ちつと舌打ちをすると錫杖を横に滑らせて刀を綺麗に受け流し、少

女から少し離れた位置に移動する。自分の間合いであり、尚且つ術を使うのにも最低限必要な距離。それを保つように考慮して。

「お前が、鬼、か？」

雷封の言葉からは、困惑の響きが聞いて取れた。少女は無造作に刀を構えたまま、答えを返す。

「だから、聞いたでしょ」

あたいに何か用？つて。

アレは、そういう意味だったのか――。

「あんた、被い屋の割りに鈍いんだね」

そう言つて、くつくつと笑つた。

――何か、変だ。

「俺が鈍いんじゃないよ」

言いながら彼は構えを解いた。目の前の少女はいつでも刀が振れるよう構えているというのに、雷封は白けたように頭をぽりぽりと搔く。

「お前が、弱いんじゃないの？」

この台詞に、少女は虚を突かれたような顔をした。それを見て、雷封は更に言葉を続ける。

「馬鹿力なのは認めるけどよ。お前、それだけなんだろう？正直、妖気も何も感じねエよ。お前が本当に、赤月村の人間を食うとか言う鬼なのかよ」

まア、普通の人間にや、その馬鹿力だけでも充分おっかねエんだろうけどさ、と少女が手にした大きな刀を見て苦笑を浮かべた。

「……あたいは……人なんて、食わないよ」

「だよ、なア……」

「だけど、この辺りにはあたい以外に鬼なんていないよ。あいつらが退治したがつてるのはあたいなんだ」

だから。

あんたの目標は、あたいだよ。

言つて、少女は力任せに斬りつけて来た。だが、先程のように不

意をつかれたわけでは無い。ただ勢いに任せて斬りつけて来る、この程度の攻撃をかわすのはわけも無かった。少女の斬撃には、力はある。あっても技が無い。

「……あいつら？」

「村の連中だよ。大方、あたいの退治を依頼したのはあいつらなんだろう？」

「そりゃー、普通に考えて他にいねえよな」

少女の攻撃を軽くかわしながら言ったその言葉が、余裕たっぷりその態度が、彼女の癪に障ったらしい。少女は頬をかつと紅潮させて叫んだ。

「馬鹿にするなっ!!」

ギンツと鈍い音を響かせて、雷封の手から錫杖が弾き飛ばされる。それは少しの間宙を舞い、さくつと小さな音を立てて雷封よりもかなり後方の地面に突き刺さった。それでも、少女は刀を振るう手を止めない。雷封目掛けて刀を思いっきり横に薙いだ。

——と。

それが雷封に届く寸前。少女は巨大な刀をびたりと止めた。彼女の紅くなった頬から、すうつと一筋更に赤いものが鮮やかに流れ落ちる。

「これ以上やるってんなら、次は当てるぜ」

感情を消し去った低い声でそう言い放つ。彼の手には弾き飛ばされた錫杖の代わりに、札が何枚か握られていた。

「お前の刀を避けながら術を使うぐらい、簡単な事だからな」

感情を消しただけでこれだけ冷たい響きになるのかと思うほど、彼の言葉は突き刺さるような響きを伴っていた。少女は血を拭う事もせずに刀を握り締めたまま、後ろを振り返る。

少女が背にしていた木の幹に、一本の細い氷柱が突き刺さっていた。少女の頬を掠めた時についたのだろう赤い色が、太陽の光を受けてきらきらと光っている。

「死に急ぐ事もねえと思うけどなア」

そう言った雷封の声は、さっきまでと同じいつもの彼の声音だった。少し人を小馬鹿にしているような、軽い音を持った声。

「……けどあんた、あたいを退治しに来たんだろ？」

「まア…… そうなだけどさア……。正式に俺が受けた仕事じゃねエから正直、どーでもいーンだわ」

さらっと言い切ったその言葉を聞き、少女は複雑な表情を浮かべた。怒っているような、不思議がっているような、それでいて楽しんでいるような。

「人を食うような鬼だって言うから、どんなモンかと思って来てみたんだけどよ。まっさかそれがこんなガキだったとはねエ……。すつきり大暴れするどころか、準備運動にもならねエじゃねエかよ」

「……あんたが強いんだよ。あたい、今までに来た被い屋つてのはみーんな追い返してやったもん」

「そいつらがガセだったんじゃないかねエの？」

「……あんた……。すっごいム力つく」

「そりやどーも。今頃気がついたのかよ」

にやりと意地の悪い笑みを浮かべて言った雷封の台詞に、少女も思わず苦笑をこぼした。毒気が削がれたのだろう。刀を持った手を軽く振る。たったそれだけの動作で、使い手よりも大きなその刀は一瞬でかき消えた。

「ほ。とりあえず、やりあう気は無くなったみたいだな」

「だって、あんただってその気は無いんでしょ」

「まアな」

言いながら、後方に弾き飛ばされた自分の錫杖を拾いに歩いて行く。輪を作らず、真ん中から互い違いに交差している特殊な形をした錫杖は、しゃらんと澄んだ音を立てた。

「俺は古刹雷封^{こせつらいほう}。一応断っておくけどな、”被い屋”じゃねエ。ま

ア、”何でも屋”つてとこかな」

「変わんないじゃん」

ぼそつと言う。そんな少女を見て雷封は何か忘れてるんじゃないか

？と問いかけた。

「……何を？」

「名前だよ、名前。お前の名前は？」

聞かれて、一瞬戸惑ったのが分かった。

「……ん？ どした？」

「名前聞かれるの…… すっごい久しぶり」

みんなあたいの事、鬼としか呼ばないから。

そう言つて、少し寂しそうな笑顔を見せた。

そして、ぽつりと自分の名前を口にする。

「……沙雪^{みゆき}」

「雷封さん、一人で行かせて大丈夫だったんですかねー」

「というより、この場に兄さんがいても邪魔なだけですから」

のほほんとあまり心配していなさそうな草雲の台詞と、あっさり邪魔だと言い捨てた霜雪。その短い会話を聞く限り、どちらにせよ彼の兄はあまり心配されては無さそうだった。

彼らは今、草雲にこの話を持ちかけた人物……つまり、この赤月村の村長である青戸珪宋^{あおとけいそう}の家で寛いでいた。その時こそ正に雷封が「今頃あいつらは美味しい飯でも食ってんだろうな」とか思っている瞬間だったりしたのだが、もちろんそんな事が分かるわけも無い。だが、美味しい飯を食べてこそいなかったものの、淹れたてのお茶にこの小さな村にしては高そうな茶菓子を出されていたのだから、雷封からしてみれば同じ事だっただろう。

青戸珪宋は、霜雪が考えていたよりもずっと若い人物だった。草雲から若いというのは聞いてはいたものの、それでも彼が想像していたよりもずっと若い。見た目から判断するにまだ三十にもなっていないだろう。どうやら、両親が早くに亡くなってしまった為、こんな年で村長を継ぐしか道が無かったらしい。

それはそれで、難儀な事ですね、と霜雪は茶菓子を食べながら呟

いた。

「何が、難儀なんです？」

耳聴く聞きつけて、草雲が質問してくる。

「いえ……継がなきゃいけないのにそれを放棄している人間もいるのにな、と思ひまして」

「ああ……。雷封さん、ですか」

「まあ、分からないでも無いのですけどね」

もし同じ立場だったなら、私だって家出していたかもしれないし、と霜雪は淡々と言う。彼から兄の行動を肯定するような台詞を聞けるのはかなり珍しい事だった。

「貴方の好奇心の強さは身を滅ぼしかねないから忠告しておきます。くれぐれも、兄さんに家出の理由を聞いてはいけませんよ。冗談抜きで殺されます」

真顔で深い紫色の瞳で見つめられ、草雲も真顔で頷いた。実は何回もこの台詞を言われた事があるのだが、その度に真顔で頷く羽目になっていたりする。それだけ、この事に触れた時の霜雪の態度はふざけたり出来ないような雰囲気なのだった。

「それにしても……珪宋さん、何処に行っちゃったんでしょうねえ」

依頼人であるはずの珪宋は最初に二人に形だけの挨拶をし、そのまま顔を出さないのである。お陰で、話の詳細を聞く事も出来ず、出された茶菓子を食べ続けるだけという、霜雪に言わせたら非常に無駄な時間をだらだらと過ごしているわけなのだ。霜雪はお茶をすすりながら「さあ？」と至極簡単な返事をして寄越した。

「何にせよ。待つしか無いでしょう。兄さんには悪いですけど」

おまけのように付け加えた言葉。多分、そんな事は髪の毛の先ほども思っていないだろうと草雲は勝手に思っていたりするが、流石にそんな事は口には出せない。そんな突っ込みを入れてみようものなら、後が怖いわけだし。雷封にすら勝てない自分が、この茶髪の少年に口で（他のどの部分でも、だが）勝てるわけが無い。

良いお茶ですねえ、とのんきにお茶をすすっている霜雪を横目に、

少しぐらいいは鬼探しをしているであろう雷封に後ろめたさを感じてしまう草雲だった。

そんな事を考えていたら。

何か大きなものが急降下をして来た。

気をつけていないと聞こえないほど静かにばさつという音を立てて舞い降りて来たそれは、この昼間にはまず似合わない鳥、梟だった。急降下をし、霜雪の前にふわりと降り立つ。その際に大きな羽が草雲の顔を強かに打ちつけて行ったのだが、この大きな鳥はそんな事を全く気にしていないようだった。

「……おや。兄さん、鬼を見つけてしまったようですよ」

梟の運んできた文書を見、驚きも何もしていないようなあつさりとした声音で言う霜雪。相変わらず、汚い字ですねえ、と呆れた声で続けた。

返事の文章を書いている霜雪の一房だけ長い前髪を急かすように梟が引つ張っている。それに構わず、梟の足に返事をくくり付けると大きな鳥はやつと髪を引つ張るのをやめ、首をくりつと一回転させると大きく翼を広げ元来た方向へと飛び去って行った。それを見送り、霜雪はまたお茶に手を伸ばす。

「見つけたって……。見た目も分からないのに？」

「兄さんは、物の怪に好かれやすい性質してますから」

それぐらい、貴方もお気付きでしょう？

そう、にこやかに問い掛けられて、思い切り肯定をしてしまう草雲だった。

桜鬼・其の二

ばさつ。

静かな羽音を立てて飛び去った梟を見送り、雷封は振り返った。小さな家の中では、沙雪がその光景を黙って見守っている。

「あなたさ……。変わってるよね」

雷封がかろうじて存在を主張している粗末な縁側に腰を降ろしたのを確認し、沙雪がぼそつとそう言った。興味無さそうな口調と裏腹に、その瞳は興味津々といった光を込めて彼を見つめている。雷封は水を一口飲み、「そつかア？」と意外そうに返した。

「俺から見りゃ、お前の方がずつと変わってるけどねエ。退治されそうになってもずつとここに居座ってるなんてよ」

「……あたい、何も覚えて無いからさ。気がついたら、ここにいたんだ」

雷封の横に膝を抱えて座り込み、何処か遠くを見ているような目で沙雪は呟いた。その様子を見て、雷封は軽い既視感デジャヴを覚える。

——そう遠くない昔、隣で座り込んでいる少女と全く同じ表情を浮かべていた少年の姿を思い出してしまったから。

「どーも自分は、こういった子供を拾ってしまう事が多いらしいと、彼は知らずに苦笑を浮かべていた。少女がちよつと眉を寄せ、怪訝な表情を作る。」

「いや、ね。どーも俺、ガキに好かれてンのかな、ってさア」

「本気で言ってるの？」

「うん。結構本気」

しれつと答えた雷封を見つめ、失礼なほど長いため息を吐いて沙雪は目を逸らす。また、彼女の視線は、何処を向いているのか分からなく曖昧になった。そんな表情を見ると、子供とは思えないほど冷めた、大人びた顔になる。

それを見つめ、雷封は真顔になってぼつりと言う。

「前にも……お前と同じような事言つたガキ拾つてよ」

——僕は……誰、なんですか？

「お陰で、それ以来ずうずうつと付き纏われる羽目になってたりしてるモンだからよ。ガキに好かれンのかねエってさ」

「……あたいに付き纏つてるのはあんたじゃないか」

「そりゃー、一応は仕事で来てるんだからな。お前を見つけれませんでした、はいさようならで終わるほど、俺の弟は甘かねエンだよ」

「何だあんた……使いつぱしりなの」

「誰がパシリだ。俺はね、弟の顔を立てて、あいつがやりたがらないような事をやってやってるだけなの」

「でもホントは、頭上がないんでしょ。さっきの式神だつて、その弟にあたいの事見つけたつて報告するために飛ばしたんでしょ？ 探すのはあんたで、弟はあんたから報告があるまでのんびりしてる。充分、こき使われてるじゃん」

今まで通りの無表情に見えて、その瞳に子供らしいいたずらっぽそうな光が灯っているのを雷封は見つけた。確かに俺は、ガキと相性が良いらしいと心の中でのみぶつぶつとぼやく。

「へいへい。まア、そう思うなら思つとけ。ンな事よりよ……。お前、さっき何か話そうと、したよな？」

「……何が？」

いきなり真面目な話を振られ、沙雪はあからさまに動揺したようだった。視線が定まらず、空中をあちらこちらと彷徨っている。

「今更隠す事もねエじゃねエか。さっきは、何か話そうとしただろ？ そうじゃなきゃ、何も覚えて無いなんてわざわざ人の好奇心くすぐるような事、言わねエよな？」

「……普通、遠慮しない？」

雷封に言われてやっと、自分がそんな事を口走つたのだと思い出したのだろ。失敗したなあというぶすつとした顔になりながら、沙雪はぼそりと突っ込みを入れる。雷封はふるふるとかぶりを振つ

て、「しない」と一言あつさりと言いつつ放った。

「少なくとも、今はな。お前が何で退治依頼が来るほど嫌われてるかっての、分かるかもしれねえし」

「……嫌われてる理由、分かっているもん」

つんと横を向いて、早口で言い切った。

「あ？ そうなの？ それじゃ話が早えだろ。俺はな、理由も分からねえで勝手に退治すんの、嫌いなんだよ」

「それなら、何でこんな仕事してんのさ？ 毎回毎回、こつやつて理由聞いて退治してるわけ？」

「そーゆーワケでもねえけど。さらつと問題すりかえるなよ。今は俺が、質問してるんだぜ？」

「……アンタってホント、むかつく」

ぼそつとそんな事を呟きつつも、沙雪はぼつぼつとその『理由』を語り始めた。その間、雷封は少女から目を逸らし、遠くの空を見ているような目付きで彼女の話の聞いている。時々、目を瞑ったりするものだから、本当に沙雪の話を聞いているのかと心配になるほど、関心の無さそうな顔をしていた。

「……名前聞かれるの久しぶりって言ったの……嘘なの」

そんな台詞から始まった沙雪の話。

それは確かに、彼女の知りうる限りの理由で。

そつ、知りうる限りの――。

――ヒラヒラ、ヒラリ。

青戸珪宋が姿を現したのは、雷封に梟しきがみを送り返し、のんびりと寛ぎながら出されたお茶を二杯もおかわりをした後の事である。年若い村長は、部屋に入るなり待たせた事を詫びると二人の前に腰を下ろし、早急に用件を切り出した。その行動が妙に焦っているように

見え、霜雪はふと首を傾げる。

「……どうか、しましたか？」

それを草雲に目ざとく見咎められたが、霜雪は「いいえ、何でもありませんよ」と普段通りの穏やかな口調で返した。内心、「いないところで敏感ですね」と呟いていたのだが、彼がそんな事を考えているとは誰も気がつけないだろうほど穏やかな口調だった。

「鬼については、もうお聞きになりましたか？」

「ええ、大体のところは」

「そうですか。それなら話が早い。どうかあの化け物を、退治して頂きたい」

「もちろん、それなりの報酬が頂けるのでしたらそれは構いません。しかし、お引き受けする前にいくつか確認しておきたい事があります」

「……え」

霜雪の言葉を聞き、そう声を上げたのは草雲だった。その視線が、約束が違うと言わんばかりに霜雪と珪宋の間を行き来している。

そんな草雲に視線を向ける事無く、霜雪は質問を始めた。

「まず。草雲さんに聞いた話では何でも『人を食いかねない鬼』が出るという事でした。という事は、まだそういった被害は出ていないわけですね？」

「ええ、その通りです。だが、凶暴な化け物がいるのは事実だ。被害が出る前に手を打っておきたいと思うのは当然でしょう」

「しかし、そんな鬼が出るという割にはこの村は平和そのものに見受けられます。何故です？ 私は今まで同じような依頼を受けて様々な村を見てきましたが、赤月村のように普段通りを保っていられた村などありませんでしたよ」

穏やかな口調の中に挑発的な響きを感じ取り、珪宋は眉をひそめる。

「何が、おっしゃりたいのです？」

その質問に霜雪が答えようとした時。

「つまりさ。この話は兄さんの狂言じゃないかって言いたいんだろ、被い屋さん」

廊下から聞こえてきた少年の声に、珪宋は弾かれたように振り返る。

「ちょうど良い。僕もいい加減、聞いてみたかったところだよ。どうしてこんな嘘をついてまで、沙雪を殺そうとするのかってさ」

「……どなたです？」

霜雪のその言葉には二つの意味合いが込められていた。一つは、今この場に乱入して来た少年の正体を問うた質問。そしてもう一つは、少年が言った「沙雪」という人物の正体に対して言った言葉。

「……青戸珪吾^{けいこ}。私の、弟です」

疲れたように掠れた声で言った珪宋の言葉。先ほど少年自身が珪宋の事を「兄さん」と呼んでいる事からしても、それは紛れも無い事実なのだろう。そう結論を出しながら霜雪は、「弟さんがいらっしやるなんて、聞いていませんよ」と話を持ち掛けて来た草雲に向かって小さく呟いた。

「あ、いえ……。私も、今初めて知ったものでして……」

そんな何気ない言葉の中に、何となく威圧感のようなものを感じ、何とは無しに縮こまりながら草雲が答える。それはいつも、血の繋がらない弟の言葉の中に雷封が感じているものと同じようなものだったのだが、草雲がその点に関してピンと来る事は無かった。

「その人が知らないのも無理無いと思うよ。だって兄さん自身が言っていないんだろ、僕の事」

兄さんは、僕の事を話さないから。

「僕が、沙雪と仲が良いから。だから、兄さんは僕の事を人に話せない。村長の弟が、問題の鬼と仲良くしてるなんて言えないから」

「珪吾。お客様の前だ」

「そう。立場ってモンがあるんだよね、兄さんには。でもだからって、何の罪も無い沙雪を殺して良いなんて事は絶対に無いよ！」

「珪吾ッ！」

ぴしゃりと自分の名を呼ばれ、少年はびくんと背筋を伸ばした。

「……珪吾。私はお客様とお話がある。部屋に戻っていなさい」

弟の顔を見る事もせずに言った台詞。静かな声だが、有無を言わせぬ響きを伴っている。

だがその顔には、ありありとした疲れが見て取れた。

珪吾が立ち去ってしばらくの時をおき。歳若い村長は「お見苦しいところをお見せ致しました」と言って深々と頭を下げた。それを見て、草雲なんぞはとても居心地の悪さを感じたりもしたのだが、隣に座る、彼より十も若い被い屋の少年はいつもと変わらぬ普段通りの態度を崩さぬまま一言「いいえ」と返す。

歳は若い自分などよりもずっと場数を踏んでいる。

この落ち着きは、その慣れの所為か、それとも生来の性格の所為か。

何となく、後者っぽいよなーなどと、むしろどうでも良い事をふと考えてしまう草雲だった。

「弟さんがおっしゃっていた、沙雪、という人物が貴方が言う『鬼』なのですね？ 先程の会話から察するに、『人を食いかねない』と言っているのは貴方だけだ。違いますか？」

「……その、通りです」

微妙な、間があつた。正座している膝の上でトントンと人差し指が一定のリズムを刻んでいる。

「一体どういう事なのか。全てお話して頂けますね」

柔らかい口調だが有無を言わせぬ響きを持った台詞である。諦めたように肩を落として肯いた村長を見、草雲は改めてこの幼い顔をした少年の怖さを思い知ったような気がしたのだった。

——沙雪は、半人半鬼なのです。

ええ、半分は人の血が混ざっているのです。だからなのか歳の所為なのかは定かではありませんが、鬼としての力も然程強いもので

はありません。

……はい。

お察しの通り、そんな事は問題ではありません。鬼である事が、問題なのでは無い。

問題なのは、人の血です。

彼女の、沙雪の父親は——青戸兵衛^{アヲヘイヱウ}。

赤月村前村長にして、私達の父親。

沙雪は、父と鬼の女の間に来た子供です。私達とは異母兄妹という事になる。

え？

ああ、この事は、私しか知りません。珪吾も、当の沙雪も知らないはずだ。

——いいえ。

それは、違います。

珪吾と沙雪の仲が良い事。それは、喜ばしい事態じゃないにしても、貴方を雇ってまで沙雪を追いつけて欲しいという理由にはなりません。

父は、とても良い村長だった。とても良い父親だった。こんな小さな村ではありますが、いや、小さな村だからこそ、父は真剣に人々の悩みに耳を傾け、この村をもっと良い村にしようと努力した。だから、小さいけれど小さいなりに纏まった村になり、父は信頼を集める事が出来た。

——ただ。

父は……一度だけ、過ちを犯した。

十年以上も昔の話です。

父は、青戸兵衛は、一人の行き倒れの女を助けた。白い髪と緑の瞳を持った、女を。

それが、沙雪の母親です。鬼狩りに会い、命からがら逃げ出してこの村に辿りついたところで、父に助けられたのです。

父は、そういった話が大嫌いでしたから、大層怒っていたのを覚

えています。今でこそ、殺すほど追い回すという事はほとんど無くなりしましたが、当時はそこまで畏怖され、虐げられていたのですよ、鬼とは。

話を聞いて大層憤慨した父は、村の小山の上に建っていたあばら家を綺麗にし、彼女をそこに住まわせた。村人となれば、自分が責任を持つて同じような目には合わせないと約束して。

当時それが出来たのも、一重に父が良い人間だと言う印象が強かったからです。良い村長。良い父親。良い人間。その印象が有ったからこそ、風当たりの強かった鬼を自分達の村に受け入れるという提案にも然程意見はされなかった。

良い人間がする良い行いは、上手い具合に美談になります。どんな、良い方向へと尾鰭がついて。
そして。

あまりにも美化され、理想化された人間が起こす予想外の行動は、それこそ予想外の方向へと一人歩きしてしまう。

良い人間が良い事をするのは当たり前。当たり前になり、それに慣れてしまつて父が何をして良い人間だと言われるようになったのか思い出せなくなつてしまつた頃に。

——もし。

もし、予想外の行動を、起こしたなら？

……私は、そうなるのが、怖い。

父が、母を裏切つていたのだと、露見するのが怖いのです。

最初は、同情だったのかもしれませんが。自分達と違つ者を否定する、その弱さに憤慨したのも事実でしょう。

ですが。

超えてはいけない一線を越えてしまつたのも、また事実です。母を裏切り、私達をも裏切つて。

六年前、母は何も知らずに流行り病で亡くなった。父も、後を追うように同じ病で四年前に亡くなりました。

沙雪は、十か十一です。父は、四、五年間も母を、そしてその後

も私達と、村人達を欺き続けていた事になる。

……死ぬまで、ずっと。

——私はね。

それが、露見するのが、怖い。

——怖いんですよ。

ここは、父の村なんです。私が継いだ今だって、父の村なんです。父が纏めて、父が住み易くした村。

それが、赤月村なんですよ。

だから。

だから、怖いんです——。

長い話を語り終え、膝の上で固く握り締めた拳に暗い視線を落としながら口を閉ざした珪宋を見つめながら、草雲は複雑な気分を味わっていた。

私が継いだって、父の村——か。

少し、理解出来るかもしれない。

親が偉大であればあるだけ、子供には親の影が纏わりついてしまう。それは昔、草雲自身が身を持って経験した事であり、だからこそ認められずとも違う道を選んだのだろう。

それが、親の影を断ち切る唯一の方法だったから。

この人は。

この、若くして父の村を継がざるを得なかった村長は立場上、それも出来なかった。だからこそ、付いて回る父の影に縛られ、縛られているが故にその影が汚される事を恐れているのだ。

——情けねエ。

雷封なら、きっとそう言うだろう。家出という形で、全てを強引に断ち切っているらしい、彼なら。

だったら、自分の村を作っちまえよ。

「……それで」

そんな草雲の思考を中断したのは、いつもと変わらぬ聞き慣れた少年の声だった。不思議にすら思える程、いつもと変わらない冷めきった声音。

——何故。

何故、この少年は、こんなに落ち着いていられるのだろう。

仕事だから、だろうか？

……いや。

それは何か、違う気がする。

「それで。沙雪の母親は、どうなったのです？」

「え？」

——嗚呼。

これは、ただの。

「貴方のお話には、沙雪の母親がどうなったのかという件は出てきませんでした。真逆今も、その小屋に一緒に住んでいるわけでは無いのでしょうか？」

これはただの、好奇心だ。

何も知らない小さな子供が、どうして、何で？と、親に質問をするのと同じ。

純粹にただ、知りたいだけ。

少年のいつもと変わらぬ深い紫色をした瞳を見、草雲は何故かそう思った。

霜雪の問いに、若い村長はゆるゆると首を振って答える。

「彼女がどうなったのか、私は知りません。父が亡くなった後、沙雪を連れてこの村を出て行ったのですが」

少し経ち、何故か沙雪だけが元居た家に戻って来たのだと言う。

「沙雪は……あの子は、何も覚えていなかった。この村の事も——父の事も」

「ふむ……。それでは、もう一つ」

何故、貴方は沙雪がご自分の妹だと、知っているのです？

「そ、霜雪さん！ そ、そんな事は……ッ」

——別に、どうだって良い事じゃありませんか。

そう続けるつもりだった。これ以上、この少年の好奇心を満たす為だけに珪宋を追い詰めるような真似はしなくなかったのだ。

だが、草雲のその言葉は、他でも無い珪宋自身の台詞によって遮られてしまう。

「守り刀が」

「守り刀？」

「沙雪は、うちの家紋のついた守り刀を持っているのです」

見るつもりは、無かったのだ。

それはきつと、偶然という名の悪戯だったのだろう。

「父が与えなければ持っているはずがありません。ただの村人の娘であるなら」

何故、そこまでするのです？

桜鬼・其の三

自室に戻る気にはなれなかった。

かと言つて、何処へ行くあてがあるわけでも無い。ただ、兄と被い屋の会話が聞こえない場所ですえあれば何処でも良かったのかもしれない。

抑えきれずにふつふつと込み上げて来る怒りと戦いながら、青戸珪吾は無意識の内に沙雪の下へと足を進めていた。村外れの山の中とは言え、小さな村に小さな山である。然程遠い距離では無い。

山の入り口付近で。

ちりん。

微かに鈴の音が聞こえたような気がして。

彼は足を止め、辺りを見回した。するとすぐに、癖のある赤毛に黒い法衣と言う、色合いも格好も目立つ青年が山を下ってくるのが目に入る。その胸元には、金色の小さな鈴がアクセントのように揺れていた。

その派手な色合いと特殊な服装には見覚えがある。

——今日の朝。

沙雪の家からの帰り道で——。

——あの格好。

あいつも。

あいつも、被い屋の仲間だったんだ。

ざわりと。

背中を何か、冷たいものが通り抜ける感覚を覚え。

……まさか……。

……まさか。

それ以上は、考える事が出来なかった。考えるよりも先に身体が動いてしまっていた。

「沙雪をッ、沙雪をどうしたんだッ！」

被い屋の前に躍り出て、力一杯叫んでいた。叫んだ勢いをそのままに立ち止まった青年を見上げ、思い切り睨み付ける。

青年——古刹雷封は、きょとん、とした顔をしていた。

「……へ？」

ついでにそんな、気の抜ける言葉を一言。余計に、頭に血が昇る。
「とぼけるなっ！ お前、被い屋の仲間だろう！ 沙雪をどうしたんだって聞いてるんだよッ！！」

「いや。別にどうもしてねエけど」

疲れたようにそう呟き、どうやら今日つてば、ガキに喧嘩吹っかけられる日らしいぜと苦笑を浮かべた。

「喧嘩……？ じゃあ、やつぱりッ」

「あのな、早とちりすんなよ。確かに俺は沙雪に会ったし初ッ端から喧嘩吹っかけられたけどなア、別にどーにもしてねエぜ。弱肉強食の世の中だけだよ、俺、弱い者イジメって性に合わねエの」

ま、茶をご馳走になって帰って来ました、と雷封はさらりと言った。その、人を小馬鹿にしたような態度を見ると、本気で腹を立てている事自体が馬鹿らしく思えて来るから不思議である。

「……で？ 血相変えて物騒な事叫ンでくれた少年は、何処のどちらさん？」

「……人に名前を訊く前に、まずは自分から名乗れ」

「ほ。言うねエ。まア、それもご尤もな意見だし、有難く受け入れておく事に致しましょう。私は、古刹雷封と申します。見ての通りご推察の通り、被い屋を生業としております者。で、貴方様は——」
にやりとした笑みを浮かべ。

「赤月村村長、青戸珪宋様の弟、青戸珪吾様で宜しいので？」

わざとらしく、取ってつけたような敬語だった。敬語というのは面白いもので、本来丁寧な言葉であるはずなのに、使う者によつてはこれ以上無いという程嫌味な言葉に聞こえるのは何故なのだろう。雷封の場合は、正にその典型である。そもそも彼が敬語を使った時など数える程しか無いし、それこそ嫌味を言う時か人をからかう

時にしか確認されていないので、もしかしたら彼の頭の中で、敬語と言うのは礼儀を弁えた人間が使う言葉だと認識されていないのかもしれない。

「……誰から聞いた」

一度治まった苛立ちがまたやってきそうになるのを抑えながら、ぼそりと言った。

「さっきも言っただじゃねエか。俺は、沙雪ンとこで茶アご馳走になつて帰つて来たのよ？」

わざわざ語尾を上げ。

「だからよ。茶ア飲みながら色々話聞かせてもらつたつてワケさ。今まで何があつたのかつて事も、お前つて言つ彼氏がいるつて事もさア」

「……彼……ッ！」

「つて言葉は俺の脚色。満更間違つてもいなさそうに見えるけどねエ」

そう言つて、ケラケラと笑つ。その悪びれた様子の欠片も無い顔を見ていると、腹が立っているのか楽しんでいるのかよく解らなくなつて来ている自分がいる事に少年は気がついた。いつの間にか、兄に対する怒りも何処かへ吹き飛んでしまっている。

——今までの被い屋とは、印象が違う。

「ま。ちようどイイヤ。俺、お前ン家に用があるンだよ。案内してもらえると、助かるンだけどなア」

「……うちに？」

「そ。お前ン家にさ、融通の利かねエ可愛げの無い少年と、押しの弱そつな物書き先生がいるハズなんだけどねエ」

——ああ。

心の中で一人、頷いた。然して関心が無さそうに珪吾を見つめていた雷封だが、どうやらそれを読み取つたらしい。目を細め、にんまりと口の端を持ち上げた。

「心当たりがおありのようで」

——何故、そこまでするのです？

珪宋の言葉が、頭の何処かに引つ掛かっていた。どうも、居心地が悪い。柄にも無くやり場の無い苛立ちを覚え、霜雪はぽつりと呟いた。

「……勝手な事を」

二人が居る部屋は、先程までと同じ部屋である。この重苦しい空気と珪宋がいないのを除けば、ついほんの少し前までと何ら変わりはない。

「……私は、余計な事をしたのでしょうか」

重たい空気に耐えかね、口を開いてはみたものの。ついて出たのはよりにもよってそんな言葉だった。霜雪の苛立ちを感じ取っていた所為かもしれない。それにしたって、もうちょつと他の話題があるだろうと草雲は自身に情けなさを感じたりするのだったが、言葉にしてしまったものはもう、どうにもならない。今更、無かった事には出来ない相談なのである。

案の定。

少年はぴくりと片眉を跳ね上げ、草雲を見た。

「余計な事、とは？」

「いえ……。私が、考え無しにこの話を持ち掛けなければ良かったのかなと思ひまして」

「何故、そうお思いになるのです？ 貴方は面白半分で話を聞き歩いていただけとしても、私達にとって、これは仕事ですよ。仕事を受けるか受けないか。それを選ぶのは結局私達なんです。余計な事だと思えば、引き受けなければ良い。それだけの事です」

「そう、ですか」

面白半分、という言葉にトゲが感じられたのはきつと、草雲の思い過ごしではないだろう。大体、面白半分も何も。この話を兄弟に持ちかけた際にはもう、自分にはツテがあると言ってしまったのだ

と白状するハメになっているのだから。

また、重苦しい沈黙が訪れた。

……面白半分、ですか。

確かに、そう見えても仕方が無いだろうという自覚はある。自覚はあるがそれでも、この少年にはつきり言い切られてしまうと何だかとても居たたまれない気分になった。場違いな場所に、何の考えも無くふらりと迷い込んでしまったような、そんな気分。

酷く、居心地が悪かった。

全く、私は。

何をやっても、中途半端ですねえ。

種田草雲という人間は、良くも悪くもお人好しなのである。頼まれればまず嫌とは言えないし、聞くなと言われれば例え眠れない程気になっていたとしても聞く事が出来ない。それでいて、好奇心だけは人一倍強いものだから、少しでも興味を惹く話を聞けば首を突っ込まずにはいられなくなる。その結果、中途半端に噂を聞きかじり、気になる事があっても深いところまで問い質す事が出来ない為、中途半端な噂は中途半端な噂のまま自分の中できちんと消化させる事が出来ずに悶々と抱え込む事になるのである。

今回の話も、その典型だと、草雲は思う。

鬼の噂を聞きつけ、珪宋から話を聞いた時。もっと深いところまで、問い詰めてみれば良かったのだ。あるいは、鬼退治が出来そうなら知り合いなどいないと、断っていれば良かったのだ。

そうすれば、今ここでこんな重苦しい空気を吸っている事も無かったに違いない。

知らず知らずのうちに、ため息がもれていた。

「先生。ため息ばっかついてつと、早く歳取るって言うぜ」

半分だけ開けられた障子の向こうから。

そんな、聞き慣れた皮肉が聞こえた。

「……兄さん」

言つて霜雪が立ち上がり、閉まっている方の障子をがらりと開けた。それと同時に薄暗い部屋の中にも光が差し込み、立ち込める重たい空気をさあつと洗い流して行く。

雷封は、庭に足を投げ出すような格好で縁側に腰掛けていた。傍らには、彼の得物である不思議な形をした錫杖が立てかけてある。履き物を履いたままだというのを見ると、家に上がらず勝手に庭に入り込んだのだろう。呆れたような二人の顔を見、彼は弁解するよううにひらひらと手を振った。

「あのな、勘違いすんなよ。俺はきちんと断つてだな……」

「じゃあ何だつて庭からなど入つて来るのです。きちんと断つたなら堂々と上がつて来たら良いじゃありませんか」

「きちんと……てーかねエ。正確には、断ろうと努力した、つてエところなんだよなア」

苦笑いを浮かべて雷封が言う。だがすぐに笑いを引つ込めると真顔になつてこう言った。

「この兄弟、見事に兄弟仲よろしく無いんだろ」

まア、仮にも村長の弟が、鬼と仲良くしてるなんてのはあんまり嬉しいこつちゃアねエだろうけどよ、と面白く無さそうな口調で続け。

「あの二人、顔を合わせたつて何の話もしやしねエ。まア見た感じ、弟の方が聞く耳持たねエ話もしねエつて意地張ってる感じだったけどなア。ま、好きにしてくれつて言われたンで、好きにさせてもらつたのさ」

「つまり。取り合つてもらえなかったと」

「そ。身も蓋もねエ言い方すりゃアな」

そこで一度、会話が途切れた。雷封が、手入れのあまり行き届いていない庭を見つめて口を閉ざしたからだ。

また沈黙が訪れ、重たい空気が立ち込めそうになった時。二人に背を向け、正面にある庭を見つめたまま雷封がぼつりと言った。

「……この仕事。手エ引かねエか？」

「……え？」

けして、大きな声で言った訳でも強い口調で言った訳でも無い。それなのに、その台詞はやけにはつきりと響いて草雲の耳に届く。

「どういう、意味です」

草雲が問い掛けるよりも早く。霜雪が厳しい口調で問う。

「どういう意味も何も。そのまんまの意味だよ」

俺達が関わって、何が出来ると思うよ。

「——なア、先生？」

「……え？ わ、私ですか？」

何となく、傍観する気分で聞いていた草雲は思いもよらず話を振られ、返事に窮した。

「俺はさア。鬼退治だって聞いたから引き受けたンだ。それが、蓋を開けてみたらすつきり大暴れ出来そうな鬼なんか何処にもいねエじゃねエかよ。いねエモンは、俺がどれだけ優秀だって退治なんか出来やしねエぞ」

話を聞く限りじゃア。

俺達がどうこうする事じゃアねエだろ。

「兄さんは、どの程度まで話を知っているのです？」

固い、声。思わずびくりとする。だが雷封は、そんな弟の声も態度も慣れているのか、普段通りのやる気があるのか無いのか分からない、のらりくらりとした態度で言葉を返した。

「さアねエ。だけどな、沙雪から聞いた話と、凶暴な鬼なんざ何処にもいねエって事実。沙雪と仲が良い青戸珪吾が赤月村村長の弟だって事。そんだけ揃ってりゃア、十分じゃねエか？」

「沙雪から、一体何を聞いたのです。彼女は、昔の事は覚えていないのでは無いのですか？」

「ああ。そう、言ってたなア。気がついたら、ここに居たンだって。名前も分からなければ、何をしていたのかも分からねエ。だけど、何となく居心地が良かったンだと。ここに居たら、何かを思い出す

事が出来るンじゃねエかと」

……名前聞かれるの久しぶりって言ったの……嘘なの。

「そんな。そんな都合の良い事が」

吐き捨てるような霜雪の台詞。ちくりと微妙な違和感を覚え、草雲は「おや？」と首を傾げた。まるで、そんな事など有り得ないと悟り切っているような、感情的な言い方だったからだ。

「そう。まるで作り話みてエに都合の良い事だアな。でも、起きちまったンだよ、これが」

——沙雪？

沙雪、だよな？

ものの見事に、青戸珪吾と鉢合わせちまったのさア、と少しだけ哀しそうな声で言い、錫杖を持って立ち上がった。しゃん、という澄んだ音が草雲の耳をくすぐる。

「そのお陰でさ。他にも色々、思い出しかかつてるみてエだぜ。一体何があつて沙雪が記憶を無くしたのかは知らねエが、今まで生きて来た証を忘れちまうぐらいの何かが起こったって事だけは確かなンだ——」

そこで赤毛の青年は唐突に言葉を切った。二人に背を向けたままだから、表情は見えない。

——ま。

俺が仕入れて来た話はこのぐらいさ、と青年はさりとて言い、くると振り返った。すっかり見慣れた、人を小馬鹿にしているような表情がそこには浮かんでいる。庭に立ち、己の髪の色よりも深い、まるで血のような色をしている二つの瞳で二人を見上げていた。一瞬視線が合い、草雲はすぐに目を逸らす。

生まれ付きの色なのだろうからどうしようも無いのだろうが、正直言って草雲は雷封の瞳の色だけではどうしても好きになれないのである。真紅、紅、炎、夕日。少し考えればいくらでも比喩の仕様は見つかりそうなものだが、雷封のそれは他のどんな喩えよりも「血のような」という形容詞がしっくりはまってしまふような色なのだ。

どうも、不気味な印象が付き纏ってしまい、青年と知り合ってかなり経つはずの今でも彼はその瞳が苦手だった。

草雲がそんな事を考えているとはつゆ知らず。雷封はその赤い瞳で静かに弟を見上げ、「どうするよ」と訊いた。

「その顔じゃア。お前だつて、あんまり心境よろしくねエ話でも聞いたンじゃねエか？」

「……心境のよろしく無い話を聞かされるのは、今回だけじゃありませんから」

ちらりと、傍らの草雲に視線を走らせる。

「もう、引き受けた仕事です。引き受けた以上、途中で手を引くなど」

「職務熱心なのは良い事だけだよ。ほら、臨機何たらって言うじゃねエかよ」

「臨機応変、ぐらい覚えておいて下さい。覚えてもない言葉を使おうとしたつて、意味なんて伝わりませんよ」

「インだよ。俺が分かってりゃア」

「兄さんはともかく。一緒に居る私達が恥ずかしいです」

ねえ、草雲さん？ と少年に同意を求められ。どうしたものかと考えながら「ええ、はい、まあ」と曖昧な返事を返した。それを聞いて雷封が、大袈裟に肩を落とす。さも、傷ついたと言わんばかりだ。

そんな兄に向かって追い討ちをかけるように。霜雪ははっきりと言いつつ切った。

「ともかく。仕事は降りません。関わるだけ関わって今更手を引くなど、出来ない相談でしょう」

睨んでいると言っても過言では無い程の、きつい視線で真っ直ぐに雷封を見ている。この少年がこんな風に感情を表に出す事は珍しい。どうも、ここに来てからというものの、少年の知らなかった面を見る羽目になっているな、と草雲は思った。そして、それは一体何故なのだろうと色々思考を巡らせる。

「……俺はあんまり、気が乗らねエんだけどなア」

二、三分の沈黙の後。呻く様に呟いた雷封。その小さな呟きの中には、切実な諦めの響きが聞いて取れた。

——ま、しょうがねエ。

「で？ 一体如何する気だよ。そこまで拘るからには、何か良い秘策でもあるンだろうな」

「悪い秘策なんてものはそもそも存在しませんよ。まあ……考えは、あります」

とりあえず、ここを出ましよう、と霜雪は続け。二人の返事を待たずに表戸へと向かった。

「……考え、ねエ」

「何を、考えているのでしょうか」

「さア……？」

苦笑を浮かべて顔を見合わせ。

残された二人も、霜雪の後を追ったのだった。

それから、程なくして村は茜色の見事な夕焼けに染まり。

「ホンの少しの辛抱だ」

——ホントに、良いンだな？

念を押すようにゆつくりと噛んで含めるように訊かれた問い。

その問いに、躊躇いもせず返事を返す。

あたいはね。

あたいは、それで構わないよ。

「だってもう、この世界に未練なんてありやしないから」

赤月村には夜の帳が下り。夕闇が村を覆い隠す時刻。

霜雪と共に青戸珪宋が駆けつけた時にはもう、全てが終わった後だった。二人がやって来た事に気がつき、黒い着物の青年がふと振り向く。その小さな動作で青年の胸元に下げられている鈴が揺れ、ちりんと澄んだ音を響かせた。

彼の足下には。

血を流して倒れている幼い少女の姿。

——沙雪。

「後味悪イ仕事は全部俺の分担かよ」

青年が、低いがよく通る声で霜雪に向かって呟く。彼が左手に持っている、先が互い違いに交差しているという特徴的な形をした錫杖。その先に赤黒い何かが付いているのが目に入り、珪宋は無意識の内に視線を逸らしていた。

地面の上にも。

転々と。

「おや。面白そうだから鬼退治をしたいと言ったのは、兄さんの方じゃありませんか」

「まアな——」

準備運動にもなりやアしなかったけどよ。

あつさりとそう言い捨て、珪宋を正面から見据えた。ぞくりと、何とも形容し難い寒気が珪宋を襲う。

「さア。お望みどおり、鬼は始末してやったぜ。これで、満足か？」

「兄さん」

咎める様な響きを持った短い台詞。それを聞き、雷封はちツと小さく舌打ちをしたがとりあえずは口を閉ざした。だが、虫の居所が悪いののは誰の目にも明らかだっただろう。

恐る恐る。

沙雪へと、視線を戻した。

「……本当に」

一瞬、誰が話しているのかと思った。それが、自分の発した言葉だという事に気が付くまで、しばしの時間を必要とした。

……私は。

被い屋は、二人とも珪宋の方を見ない。

「本当に、死んだのでしょうか」

自分は一体、何を言っているのだろう。そんな事は、今日の前の状況を見たら一目瞭然ではないか。

霜雪はやれやれと言った風に首を振り、「じゃあ、確かめてみたらどうです？」と言った。

「死人は生き返ったりしません。例え、半分鬼の血が入っていようとそれは同じ事です。死人は何もする事が出来ません。何も、怖い事はありませんよ」

死人は、何も。

——父の、村。

「守り刀なんてなア……何処にも無かったぜ。沙雪が持ってたなア、ただの小刀だ。野菜を刈るにも、魚を捌くにも、一人で生活するにやア欠かせねエだろう」

——からん。

軽い音を立てて地面に転がったそれには、見覚えのある家紋など何処にも無い。変哲の無い、使い込まれた古い小刀だ。

……そんな。

すとん、と膝から力が抜けた。震える手で小刀を拾い上げ、まじまじと見つめる。

——怖いんですよ。

ふ、と笑みが浮かんだ。諦めと後悔の入り混じった、後ろ向きの笑み。

「……私は」

私は一体、何を怖がっていたのでしょうかねえ。

ふふふ、と小さく声を上げて笑いながら。

自分でも気がつかないうちに、珪宋ははらはらと泣いていた。

桜鬼・其の四

——ポウ、と遠くに小さな火が灯った。

それを確認し、草雲は珪吾に悟られないように注意しながらそつと安堵のため息をつく。

上手く、行きましたか。

つ、と横目で珪吾の様子を伺う。少年は、その光を見てはいなかった。両手を固く握り締めて膝に乘せ、ただひたすらに床を睨みつけている。

視線を妖しく揺らめく小さな火へと戻し。今、兄弟が行っているだろう事を考えた。

——計画通りに事が進んだら、青戸の家から小さな火が見えるでしょう。

そう霜雪は言って、彼に珪吾をこの家から出さないようにと頼み、珪宋を伴って家を出たのだった。

山の入り口で雷封が退治し終わったはずの、沙雪の姿を見せる為に。

もちろん、それは本物では無い。予め雷封が式術を使って作り出した型を素に、簡単な幻術を組み合わせ作り出した偽物である。わざわざ、暗くなるのを待って計画を実行したのも、それが偽物だとバレにくくする為にと霜雪が提案した事だった。

ポウ、と小さな火が一つ増えた。

あの火が灯ったという事は。少なくとも偽物を沙雪だと思わせる事には成功したという事になる。何故ならあの火は、彼女への弔いの火——生を真つ当出来なかった彼女が、今後彷徨い出てくる事が無いようにと、霜雪が仕掛ける結果——封印——の準備であるはずなのだから。

「沙雪は、何で戻って来たんだろっ」

独り言のように、珪吾が言った。

「戻って来なけりや、こんな事には」

「沙雪さんは、記憶を失っていたのでしょうか？そんな状態で、少しでも覚えがあると感じた場所に居たいと思うのは、当然じゃないでしょうか」

「そう、かな」

「違いますかねえ」

居心地が良い場所だと彼女は言っていたそうですよ、と草雲は言い口を閉ざした。

この少年は、何も知らないのである。

彼は、兄が知ってしまった事を何一つ、知らない。

沙雪にとって不幸だったのは、彼女の出生の秘密を知ってしまったのが珪吾では無く、珪宋であったという事だろう。知っていたのがもし、兄では無く弟の方であったなら。きつと、そんな事は気にせずに幸せにやっていけたのではないか――。

もし。きつと。

そんな言葉を使わずに生きられる人生を送れたら、どれだけ素晴らしいのでしょうかねえ。

何だつて、報酬を辞退しちまうかねエ。

……どう考えたつて、割に合わねエ。

そりやまア結局。鬼退治なんてしなかった訳だし、やった事といやア「鬼を退治しましたよ」と騙くらかした事だけであるのは確かなんだけだよ。

あれから十日程経った。ねぐらにしている首都外れの廃寺でごろごろとしながら、未だ雷封は先だつての仕事について鬱々と考え込んでいるわけである。普段、あまり根を詰めて仕事をする事の無い彼だけに、終わってしまった仕事にこれだけ拘るのは珍しい事だと言えた。

「……でもやっぱり、納得いかねエ」

ぼそり、と声に出して呟く。不機嫌そのもの、というような口調でぶつぶつごちゃごちゃとまた続けた。

「大体だ。そりゃア、確かに鬼退治はしてないさ。だけど実際、アイツがぬくぬく家の中で茶アでも飲んでた時にひーこら歩いて沙雪を探したのは俺だぞ？ アイツがのんびり村長と散歩みてエに歩いて来る間に式神で仕掛け作ったのだった俺だぞ。芝居とは言え、子供殺すなんて後味悪い役までやらせやがったクセに、表向きはどうあれ、依頼内容と違うから報酬は貰えねエだと？ じゃア何だよ、俺はタダの骨折り損の草臥れ儲けじゃねエか」

ぶつぶつとぼやいて、雷封は立ち上がった。いくら悩んだってどうしようも無い事を悶々と考えていると、余計に頭に血が昇る。元より、あれやこれやと考えるのは性に合わない質なのだ。

気分転換でもしようと、思いつき大きく伸びをする。埃っぽい寺に籠りつ放しだったのが悪かったのか骨がごきりと盛大な音を立て、気分転換どころか余計に情けない気持ちになった。

「ら、雷封さん！」

その音を掻き消すように、騒々しく駆け込んで来たのは草雲だった。黒衣の青年があからさまに嫌そうな顔をしたのにも気付かず、草雲は屋内をきよきよと見回すと切羽詰った口調で問う。

「霜雪さんは？ 霜雪さんは、何処です！？」

「あいつなら、ここじゃアいねエぜ。まアた仕事でもどっかで勝手に請けちまったりしてるんじゃないか？」

「そ、その、仕事ですよ！ 大変な事が分かったんですよ！」

「大変な事ねエ……」

じとーっと半眼で草雲を見つめる。

「また、金にならねエ情報かよ？」

そんな、雷封の皮肉は右の耳から入って左の耳から抜けているようだった。そんな事を言っている場合じゃ無いんです、とさりと受け流し、草雲はぱらぱらと帳面を捲る。

どうしても、気になって調べてみたんです、と帳面に視線を落と

したまま草雲は言った。しばらく捲つて、慌しく動いていた手が止まる。

「……沙雪さんの母上を殺したのは、珪宋さん達なんですよ!」

——だってもう、この世界に未練なんてありやしないから。

その言葉には、嘘は無いはずだった。少なくとも、そう思っていたから口にしたのだ。

それなのに。

時間が経てば経つ程、外の世界が懐かしく感じるのは何故だろう。

——今更?

外の世界では、あたいはめでたく死んだ事になってるつてのに。あの被い屋が、そう言っていた。自分を始末したように見せかけるのだと。

本当は、そうした後にはひっそりと別の土地へ移って欲しいのだと言われた。誰も、知っている人間がいない土地へ移って欲しいと。

もちろん、その言い分は分かり過ぎるほどによく分かる。死んだはずの人間が同じ場所でのうのうと生活していたらまずい。ただ、それだけの事だろう。

分かつていたのに。

何故か、首を縦に振れなかった。

それがどれだけ被い屋の仕事に支障をきたすか、気がついていないと言えは嘘になる。本当は、自分を退治する為に雇われたはずの彼らが、何故か自分を助けようとしてくれる事も、また。

だけ。

だけど、あたいには。

——ホントに、良いんだな?

あの時の、雷封の問い。その問いに、迷わず首を縦に振ったのだ。もうこの世界に未練など、ありはしないと。

その答えを聞いて。

雷封が、一瞬悲しそうな表情を浮かべたのは何故だろう。
それは、およそ彼には似合わない類の表情ではあったのだけれど、
けれど、そんな似つかわしくない表情を浮かべていたのも一瞬の
事。

彼は諦めたようにため息を吐くと、仕掛けを聞いた後でも考え直
せるからなと念を押し、気乗りしない調子で話し始めた。

依頼された通り、自分を始末したように見せかけるという事。幻
術で自分の死体を作り、その後に彼女がここを離れないという場合
はこの周りに結界を張り、他人が入れないようにするという処置を
取る予定だという事。

そこまで話し、雷封はもう一度、彼女の意思を確かめた。

「この結界は、そんなに力の強いモンじゃねエ。お前まで出られな
くなったら生活していけねエわけだし、あくまでも応急処置的な手
段なんだ。だから、何となく嫌な場所だ、ここは避けて通ろう、と
他人に思い込ませるぐらいの効力しか無い。お前の出入りを出来る
ようにするとなると、これ以上強力なモンは仕掛けられねエンだよ
つまり。」

余程ここに思い入れのある人物にや効かねエぜ。

雷封は、そう言った。

「やると決めたからにやア、失敗は出来ねエ。だから、俺個人の意
見を言わせてもらえば、この応急処置には頼りたくねエンだが……」
彼にしては珍しく、歯切れの悪い台詞だった。そもそも、自分の
こんな言葉一つで沙雪の決心が変わるわけも無いと分かり切ってい
ての意見だったのだろう。

分かり切っていながら口にせざるを得なかったのはきっと、先程、
雷封には似つかわしく無い表情を浮かべたのと同じ理由。
そう思ったから。

話す気になつたのだろうか。

「……あたいには、この場所しか無いの」

被い屋から目を逸らし、少し遠くを見るような目で。

「気がついたら、ここにいたの。あたいの知ってる場所は、ここだけなの。ここだけが、懐かしいっていう気持ちがかかる場所で、ここだけが、あたいの――」

――名前を、聞いてくれた人がいた場所で。

「だからここが、あたいの全てなんだ」

それが、雷封を説き伏せた一言だった。

――ここが、あたいの全て。

そのはずなのに。

どんな外の世界が恋しくて堪らなくなってくるのは、何故？

そんな自分に腹が立ち、手近にあった湯呑みを壁に投げつけた。

勢い良く土壁にぶつかった湯飲みはひとたまりも無く粉々に砕け散り、中に残っていた僅かな量の水も一緒に飛び散って沙雪の顔に跳ね返る。

「……水」

聞き覚えのある声が、呟いた。それが自分の声だという事に気がつくまで、少しの時間を必要とする。

声を出す事も少なくなっただから、そのうち自分の声も忘れそう。

「水、汲んで来なきゃ」

わざとに声に出して言いながら、彼女は桶を持って家を出た。

この小屋に、井戸は無い。生活に必要な不可欠の水は、赤月村にある共同の井戸から汲んで来て使っている。

辺りはすっかり暗くなっている。今なら、誰にも見られずに水を汲んで来る事が出来るだろう。

そう思い水場へと駆けて行く沙雪を、真っ白い満月が見つめていた。

案の定。

彼女は、井戸に辿りつく事が出来なかった。山の入り口付近で男が二人、立ち話をしているのが目に入ったからである。

咄嗟に、小さな身体を脇の茂みの中に隠す。尖った葉が当たって多少チクチクするが、この二人をやり過ごすまでの辛抱だと自分に言い聞かせた。

山の入り口は、自分が退治された事になっている場所である。霜雪が張った結界の境目にもなっている場所でもあり、それを印象付けるかのように小さなお地蔵様が建てられていた。その前には、誰が供えたのか小さな饅頭と真新しい花が几帳面に置かれている。

……あたいが、化けて出無いように、かな。

そんな事を考えて、くすりと笑った。死んでしまっても怖がられるなんてと、何故だか少し滑稽に思えたのだ。

井戸の前の二人組は一向に立ち去る気配を見せない。背の低い方の男がちらりと地蔵へと視線を走らせ、「可哀相になあ」と聞き取れないほど小さな声で呟いた。

「どうしてあの子は戻って来たんだろうな。戻って来なけりや、母親と同じ場所で死ぬ事にもならなかっただろうに」

小さいはずのその言葉は、まるで直接頭の中に届けられたかのよう鮮明な響きを持って沙雪の心に突き刺さる。

……え？

——どくん。

今、あの人は何て……？

母様は……。

どくん。

割れるように、頭が痛んだ。身を潜めて隠れながら、がんがんと痛む頭を抱えるようにして耳を塞ぐ。それでも、その声は容赦無く沙雪の耳の中に潜り込んで来た。

「いくら鬼の血が入っていると云ってもなあ、村長。あんな小さな女の子まで、殺す事は無かったんじゃないのかい？ 追放するぐらいで良かったじゃないか」

「今となつては、私もそう思っていますよ。沙雪は、証を持っていなかった。あの時、母親が彼女に持たせたと思ったのですが……」

——どくん。

いや。

「雪華^{ゆきか}さん、どうして村長家の宝刀を持ち出すなんて事、したんだろつなあ。そんな事さえしなけりや……あんな事には」

——違う。

一面の、朱。

珪宋が口を開くより早く。

「母様がそんな事したなんて、嘘だ！」

考えるよりも先に、言葉が口をついていた。身を隠していた茂みから勢い良く立ち上がり、一体何が起きたのかと理解出来ないまま動きを止めた二人の男に向かって言葉を叩きつける。

「あの刀は、父様から貰ったんだって母様は言ってた。父様から貰った、大切な宝物だつて。だから……ッ」

貴女が、持っていてくれる？

——貴女の父様が残してくれた、唯一の形見ですもの。

目の前が、朱に染まる。

美しい、鮮やかな朱に染まった母。

もう何も映さない、深緑の瞳。

ひゅうひゅうと漏れる耳障りな空気の音と共に、母の口から短い台詞が紡がれる。

——逃げて。

ずきりと、一際深い痛みが走った。

「……父様、だつて？」

小男が、どういう事だという疑問を筆頭に色んな質問を貼り付けた顔のまま、珪宋へと顔を向けた。珪宋は男と顔を合わす事もせず、突然現れた少女の姿に釘付けになっている。

そして、話し続ける沙雪も、また。

目の前に立つ男の顔を、穴が開くのではないかと思える程強い視線で睨みつけている。その顔は、沙雪の記憶の中の顔と一致していた。

あの時。

朱に染まった母の、肩越しに見えた顔。

薄ぼんやりとした記憶が、はつきりと形を結ぶ。

——ギリツと。

奥歯が、軋んだ音を立てた。

「どういう事だよ、村長。この子は、死んだはずじゃあ……」

訳が分からないという疑問を顔一杯に貼り付けて、珪宋と沙雪の姿を交互に見やる。珪宋は、そんな小男の姿を見る事もせず、死んだはずだな、と独り言のように呟いた。

「だが、どうやら化けて出てきた、という訳でもなさそうです。しかし、あの時の被い屋の態度は、依頼に失敗したという感じにも見えませんでした……」

……報酬を、受け取る事も、しませんでしたね。

一言一言、自分に言い聞かせるようにゆっくりと言い。

「狂言ですか」

結論を出した珪宋の顔は、何故か穏やかだった。

「生きていてくれて嬉しいですよ、沙雪。私はね、お前が死んだと聞かされても、お前の死体を目にしても何故だか心は晴れないままでした。私を縛り付けてきた父の影も、お前の母親の影も、消える事が無かったんです。……何故だか、分かりますか？」

「……村長？」

父の時は、最期を看取り。

雪華の時は、自分のこの手で。

「お前だけが、最期をこの手で感じていないからですよ。本当に死んだのかどうか、確かめられなかったからですよ。……確かにお前は死んだはずだと、自分に言い聞かせなかった日はありません。実感の沸かない恐怖。形の見えないものが一体どれほど恐ろしいものか」

だから。

こうして、姿を見る事が出来て、嬉しいのです。

そう言った年若い村長の声は、本当に嬉しそうだった。小男が、小さく喉を鳴らして後ずさる。

「……それなら、何でわざわざ人を雇ったりしたんだよ。最初っから、自分であたいを殺しに来たら良かったじゃないか」

驚くほど静かな口調で沙雪が問う。その問いに珪宋は小首をかしげ、苦笑を浮かべて見せた。

「そうなんです。今となつては私もそう思うのですが。ですがやはり、一人も二人も一緒、というわけにはいかなかったのでしょうか」

それは、瞬きする間も無い程短い、刹那の時間。

二人からそろそろと離れていた小男の目からは、まるで他人事のように話す珪宋に向かって沙雪が軽く手を振っただけのように見えた。

—— たった、それだけ。

珪宋の身体が、ゆらりと揺れた。

身体は、前の方向へ。

そして、首だけが後ろの方へ。

どさりと。

とさりと。

恐怖も痛みも無く。先程の苦笑を浮かべたままの村長の目と、視線が合った。

「……ひッ……！」

悲鳴を上げる事も出来ず、しゃくり上げたような音だけがかろうじて喉を鳴らした。すうっと通り過ぎて行った風が、生臭い匂いを運んで彼の身体に纏わり付かせて行く。

振り払いたいののに、両足が根を下ろしてしまったかのように動かない。

「……最初から自分で来てりゃ、もっと早くにこうなつてたのに」
その静かな声に小男は、びくんとして顔を上げた。沙雪は自分の身体程もある大きな太刀を地面に突き刺し、静かに珪宋を見下ろし

ている。そのあまりに不釣り合いな大きさに、彼女があのだ刀で村長を斬ったのだ、という答えに達するまで彼は少しの時間を必要とした。

そんな事を考えている時間があるのなら、必死になってこの場を離れる努力をするべきだったと気付かされるのは、ほんの少しだけ後の事である。そうしていたなら、彼がまだその場にいる事に気が付いた沙雪が何かを言おうとする事も、そんな沙雪に向かって小男が思わず、彼女の心を粉々に砕いてしまう力を持った一言を呟く事も無かったのだろう。

それも多分、瞬きする間も無い程短い、刹那の時間。

白い月明かりに照らされ、朱に染まった少女の姿を見て、彼は言ってしまったのだ。

「……鬼」

——きりと。

沙雪の心が軋んだ音を立てた。

鬼の子は鬼だって。

化け物の子は化け物だって。

皆が、そう言うなら。

——お望み通り、なつてあげるよ。

ざんツ。

嗚呼、思ったよりも、ずっと簡単。

沙雪の手に握られているのは雷封と対峙した時に見せた、小さな彼女には不釣り合いな程大きな太刀だった。鬼と人の混血であるが故、血の薄い彼女が持つ鬼としての唯一つの力。それが、魔力を結集さ

せて作り出したこの巨大な太刀をも軽々と操る事が出来る、馬鹿力。その力のままに、太刀を振るう。力任せで大振りなその太刀筋は、相変わらず滅茶苦茶なままだ。だが、戦う術を持たない村人達にはそれで十分なのである。

ごつつと固い感触が腕に伝わる。眉をしかめて動きの止まった太刀の先を見た。

得物は人間の胴体に食い込み、半分程の所で止まっている。脇腹から太刀を生やしたまま、その人間はびっくりしたように目を見開き、自分の腹から生えた太刀を当たり前のように、見た。

「……え？」

名前を呼ぶ事も出来ず。

それが、最期の言葉。

太刀を持つ手に力を入れる。ただそれだけの動作で、まるで人形を切断するように簡単に村人の胴体が半身毎に泣き別れ、ぬるりとした生温かいモノが少女の小さな身体を濡らした。

不思議そうな表情を浮かべたまま。

上半身だけの身体で、珪吾は彼女を見つめていた。

否、見上げてはいるが、その瞳は彼女を映してはいない。その瞳はすでに、何かを映すという本来の機能を失ってしまったている。

まだ、瑞々しさを保っている所為か、何も映さないソレは奇妙な宝石のように美しかった。

それはあの時の、母の瞳と一緒に。

「——なあんだ」

こうなっちゃったら、オニもヒトも一緒じゃない。

じゃあ皆、母様と一緒にになっちゃえば良い——。

——ふふっ。

自分が笑みを浮かべていると気付かぬまま。

全身を朱に染めて、白い少女は死を招く巨大な得物を振り下ろした。

ヒラヒラ、ヒラリ。

そこはもう、村では無かった。

かつて村だった場所。村が存在した場所。つまりは、廃墟となっていたのである。

その廃墟の中に、転々と転がる村人の身体。人という生命体の一部であったという事すら想像出来ないようなモノと化してしまった部品からそれなりに人としての原型を留めているモノまで様々ではあるが、それらは皆一様に恐怖や後悔と言った負の感情を染み付かせて転がっていた。これから先、二度と命の火を灯す事が無いであろうそれはもう、廃墟の中に転がる瓦礫と同一のモノでしか無い。生きている人間が居て、住むべき場所があつて。生活があつて初めてその場所は村となる。ここにはもう、その僅か一つも感じる事は出来なかった。

ほんの一月も経たない間に。

赤月村は、村を構成する物全てを失つて崩壊していた。その惨状を見て、草雲が声にならない声を上げ、その場にへたり込む。

「……霜雪。これが、お前のやった事の結果だよ」

低く、押し殺したような雷封の声。そんな彼の声を、これまで草雲は聞いた事が無かった。

その声に引き摺られるかのように、彼は黒い法衣の式術師を見上げる。

式術師は、とても厳しい顔をしていた。

「俺達に関わるべきじゃア無かったんだ。途中で、手を引くべきだったんだよ」

血の繋がらない兄の、何処か哀しげな声を聞きながら。

霜雪はぼっと一点を見つめ、立ち尽くしていた。

悔しいが。

兄の言う事は、正しかったのだ。

話を聞き、全てを理解したところで手を引くべきだったのだ。

『村』という組織の中に、無理に手を加えるべきでは無かったのだ。

「でもこれが、沙雪のやった事だとは——」

我ながら、らしくない反論だと思った。否、反論では無い。これは、ただの言い訳だ。

こんな事。

村を一つ壊してしまうなどと言う事が、あの少女以外に誰が行える。

あの——。

鬼の血を引く少女以外に、誰が。

言い訳だと、解っているから。

霜雪は、言葉を最後まで口にする事が出来なかった。雷封もまた、最後まで言わせる事はしなかった。

草雲は。

そんな二人の歳若い被い屋を、ただ黙って見つめている事しか出来なかった。

彼が知る限り。是ほど完璧に兄弟が仕事に失敗したのは、初めての事である。今まで、多少計画通りに行かなかった事があれど、臨機応変で対応し、結果的には成功を収めてきたのだ。

——だからこそ。

そんな二人を見ていたからこそ、草雲も簡単に二人に話を持ちかけたりしたのだろう。心の何処かで、失敗するはずが無い、と思い込んでしまっていたから。

ちりん、と。

雷封の法衣に結わえ付けられている小さな鈴が、鳴った。

そんな小さな音を合図にしたかのように。

その場から動けない二人を尻目に、雷封は村の中を見て回った。普段軽口を叩いている彼からは想像もつかないような厳しい表情を

崩さないまま、あちらこちらを確認して回る。

……ふと。

彼の動きが、止まった。

何かを拾おうとでもしたのだろうか。ずっと地面に手を伸ばしかけ、そして止める。

「……僕は」

呟くような霜雪の声。村だったものの惨状から目を逸らし、すぐ下の地面を見つめながら、少年は続ける。

「私は、どうしたら良かったのです？ 私は、沙雪を助けたかった」

——だから、あんな芝居まで打ったのに。

「良かれと思ってやった事が裏目に出る事はある。そんな事は良くある事です。……でも。……でもッ」

「人の心が絡んじまえばさ。それを一から十まで読み切るなんて事、到底出来やしねェんだ。そんな事を考えるのは——傲慢だよ」

雷封の言う事は正論だ。確かに、人が人の心を読み切るなんて事が出来るわけが無い。人が、人である限りは。

だからこそ。

人の世を生きていくのは、難しいのだ。

「……全く」

——季節外れの、桜が咲いちまったなァ、と雷封は呟いて。

「それじゃァ」

——鬼退治と、行きますか。

ちりん。

冷たい、鈴の音が鳴った。

桜鬼・其の五

何処からどう、狂ったのだろう。

「あたいはさ」

——やっぱり、鬼だったんだ。

小さく呟いたはずの言葉。それでも、誰もいないこの家の中では十分過ぎる程に響いて自分の耳に届いた。

分かっていて、はずなのに、さ。

「……鬼ってなんなんだよ。人間ってなんなんだよ……ッ。あたいは、どうして」

——生まれて来ちまったんだろう。

まだ、両手に感触が残っている。

肉を斬る嫌な感触も。骨を断つ硬い感触も。

頭の片隅に色鮮やかに残る、人々の、恐怖を貼り付けた表情。もう、耳にしたくない様々な、音。身体に染み付いて離れない、むせ返るような血の匂い。

そして、珪吾の、不思議そうな色を一杯浮かべた、あの、瞳。

人形のように地面に横たわっても、その色だけはずっと消えなかった、あの瞳。

——どうして。

何で、あんたは——。

「……何も、知らなかったからさ。お前が妹なんだと知っていたのは、兄貴の珪宋唯一人——。村人も珪吾も、何も知らされちゃアいなかったんだ」

外から聞こえて来た声は、初めて対峙した時に聞いた様な感情の感じられない冷たい声だった。

「雷封——。あたい、何で生まれて来ちまったんだろう。どうして、生き残っちゃったんだろう。どうして母様はあたいを」

——置いて、いつちゃったんだろう。

「あたいは、母様にも、捨てられたんだね」

まさか、と、外の声は言った。

「捨てるつもりなら、お前が生きようが死のうが気にかげやしねエだろう。それなら一緒に死んだって同じ事。そうさせず、お前を逃がしたのは一体何の為だよ？ 命を懸けてお前を逃がしたのは、一体何の為なんだよ？」

言っている台詞とは裏腹に、感情の感じられない凍りついたような口調のままだ。もしかしたら、声と口調が似ているというだけで、雷封では無い人物が話しているのでは無いかと思う程、普段の彼とは印象が違う。

分からねエなら分からねエで良い。分かりたくねエならそれはそれで構わねエ。

どっちにしる――

俺にやア関係のねエ事だ。

そんな言葉が聞こえて。

きゅっと両手を握り締めた。何だか、無性に怖くなったのだ。だって、雷封の仕事は――。

――理由も分からねエで退治すんの、嫌いなんだよ。

結局、被い屋なんだ。

結局、あたいが鬼だったのと、同じように。

――鬼退治と、行きますか。

草雲には、その言葉の真意が未だに分かりかねていた。霜雪が口を出さないところを見ると、どうやら彼にも兄の考えている事がはっきり見えて来ないのだろう。いくら自分の失敗にショックを受けているとはいえ、それをあからさまに仕事に持ち込む程、彼は素人では無いのだから。

失敗の、後始末。

もしかしたら、そういう事なのだろうか。

……だけど。

そんな事。

納得が行く、はずが無いではないか。

「……退治するのは、気が乗らなかつたんじゃ無かつたのですか」

雷封の背中を見つめながら、思わず口について出た言葉。それを耳聴く聞きつけた霜雪が、諦めたように小さく首を横に振る。

——しょうが、ありませんよ。

呟いた霜雪を一瞬咎めるような視線で見、草雲は何か言いたそうに口を開いたが言いたい事が纏まらなかつたのか、何も言わずに口を閉ざした。どうやら霜雪が、わざとに彼の耳に入るように呟いたという事には気が付かなかつたらしい。

——確かに、ね。

一体、どうするつもりなんです？

確かに雷封は、この仕事自体に乗り気では無かつた。だがそれは言わばいつもの事であり、別段気にする程の事では無いと霜雪は思う。そもそも雷封は、仕事というモノが嫌いな質なのだ。

それでも時々、兄の行動が分からなくなる。普段なら兄の単純な行動を読み切る事など、いくらでも出来る。何処でどれだけ散財しているのかも、そのお陰で詐欺紛いの副業をしている事も。

だが時々。

兄のそう言つた単純な行動は、わざとにやっているのではないかとそう思う事があるのだ。自分はそういう人間なんだと、わざとにそう見せようとしているのではないのかと。

何故、彼がそんな事をする必要があるのかと問われれば、霜雪自体解らないと答えるしか無い。ただ、血の繋がらない兄が時折見せる、別人のような冷たい一面を見てると何となくそう感じるのだ。本当の雷封という人物は、こちらなのでは無いのかと。

今だって。

抑揚の無い声で、沙雪に話しかけている兄の背中を見上げる。いつもの見慣れた黒い法衣。左手に携えているのは、独特の形をした

錫杖。

見慣れ過ぎた背中。

真意の見えない背中。

背中を見慣れ過ぎているという事が、悔しかった。結局いつも、助けられているような気がしてどうしようも無く、悔しかった。

どうするつもりなのか、明かさないと事。

つまりそれは、何があっても責任を一人で負うという事だ。

それが、共に信頼して仕事をしている事になるのだろうか。

……何か、違うような気が、していた。

雷封の、やけに淡々とした声だけが辺りに響く。

「沙雪。俺はさ。鬼を、どうにかする為にここに来たんだ」

——分かるよな？

そう言っ言葉と切ると、小さな縁側へ腰掛けた。変わった形をした錫杖を抱き抱える様に腕を組む。

「面倒くせエのは嫌いだから単刀直入に言うぞ」

沙雪は聞いているのかいないのか。家の中に居るのかどうかも判断がつかない程、家の中は静かで人の気配がしない。だから、雷封の言葉は誰かに語りかけているというより独白に近いものに見える。多少言葉を交わしただけで、一度も姿を見ていない。それでも雷封は構わず次の言葉を口にした。

「俺の式になンねエか？」

ちりんと、小さな鈴の音が響く。

「ちょ、一寸待って下さい！」

兄の言った台詞を聞いて、霜雪は思わず声を上げてしまった。式にする。

——それは。

「全ての責任を被るつもりですか」

沙雪を式にすれば、当然契約者である雷封にも責任が及ぶ。沙雪

が村を壊滅させた後に結んだ契約だとしても、事の成り行きを全て知った上で結ぶ契約なのだから。

「なアにおっかねエ顔してンのよ。そんな難しい話じゃねエって」
先程までの無表情な雷封は何処へやら。ひらひらと手を振ってみせる。その仕草は、霜雪が見慣れている血の繋がらないいつもの兄そのものだ。

「お前だって、沙雪を助けたかったからあんな無茶な事したンじゃねエか」

「……それとこれとは話が違います」

「どう違うつてのよ。同じ事だろ。お前だって、沙雪を殺したいわけじゃねエンだろが」

さらりと恐ろしい事を言い。

「それとも何。お前、沙雪がついてくんの、嫌なわけ？」

「そうじゃなくて……」

「じゃア問題ねエンじゃないの。ンなわけで、こっちは問題無いわけよ。どうする、沙雪？ 後はお前次第だぜ？」

こんなとこにいなエでさ。俺達と一緒に過ごさねエか？

——それはきつと、優しいコトバ。

そしてとても、残酷なコトバ。

「……式にするって、一体どういう意味なんです？」

ぽわんとした顔で質問をして来た草雲に吐き捨てるような強い口調で答えてしまったのは、兄が言っている事がどれだけ非常識な事が分かっていいるからなのだろうか。

「どういう意味も何も。そのままの意味ですよ」

「式として使役するって意味で良いのですか？ でも、人間も使役出来るものなんですかね」

「もちろん、出来ませんよ。ですが、沙雪は半人半鬼です。人として生きる道を捨てるなら、契約を結ぶ事も可能でしょうね」

「……そんな」

言葉を無くした草雲から目を逸らし、兄を見る。

——兄さんの方が、余程無茶な事を言っているじゃないですか。

声に出さず、一人ごちる。

一体、これの何処が鬼退治だと言うのです。

鬼として生きると、言っているようなものじゃないですか。

もちろん、霜雪だって沙雪を助けたくないわけではない。悔しいが、それは先程兄に指摘された通りである。このまま彼女を放っておけば、それこそ噂を聞きつけた退治屋だか被い屋だかに退治という名目で殺されてしまうだろう。

だが、それでも。

それこそ、他の方法があるように思える。わざわざこんな方法を取らずとも。

草雲に言ったように、沙雪の鬼としての部分と契約を結び、式として使役する事は理論上は可能である。可能ではあるが、残った人としての部分が術者にどのよう作用するかは未知数であり、力の大部分を封印されたままの状態でどれだけ受け止められるのかは不安なところである。そもそも、海を隔てた遠い異国の地では召喚術と呼ばれる術に酷似している妖そのものとの契約自体が、術者が自らの術力を注いで作り出す擬似的な亜精霊を扱うのとは比較にならない程の精神力を必要とし、術者に負担をかけるものなのだ。

何故、そこまでして。

どれだけ考えても結局、兄の真意は見えて来ない。

ヒトとして生きる道を捨てるなら。

聞こえてしまったその言葉。

どれだけ確り耳を塞いだつもりでも届いてしまうのは、心の何処

かで聞きたいと願っている自分がいるからなのだろう。

——それはつまり。

一緒に居たいと願う自分が、確かに存在しているという事。

それでも、いい。

それだけで、いい。

——ガタリ。

立て付けの悪い音を立てて開いた襖の間から。

まるで、初めて笑う事を許されたような、自信の無い笑顔を浮かべて。

「よ。元気？」

相変わらず、意地悪に口の端を持ち上げて言った台詞。

「……元気に、見えるの？」

「いんや。全ッ然」

「やっぱりアンタって、どうしようも無くム力つくよね！」

「そりゃ、どうも」

にまっとした笑みを浮かべながら、心底嬉しそうに言ったその台詞を聞いて。

沙雪は、自分の頬を熱いものが伝って落ちるのを感じ。

自分は今、泣いているのだと自覚するよりも早く、顔をくしゃくしゃにして思い切り雷封に抱きついていた。

——ヒラヒラ、ヒラリ。

「……雷封。あたいは、思い出したくなんて、無かったんだ。思い出を忘れたまま、母様と暮らしたこの場所で静かに暮らしたかっただけなんだ。それなのに」

……思い出なんて、いらなかったんだ。

いないから捨てたのに、どうして。

その言葉は、霜雪の心の奥深い所に入り込み、小さな痛みと共に引つ掛かれたような細かな傷痕を残す。

何故。

どうして、自分の生きた証をいらなかったのだと、こんなにはつきりと言い切れるのだろう。

——嗚呼。

まるで、理解出来ない事ばかり。

「どうしてツて言われてもなア。結局、いらねエモンじゃなかったから捨てられなかった——それだけじゃねエか？」

しれつと答えた雷封の、彼らしい単純な答え。

「本当にいらねエと思えるモンなんて、この世の中ドレだけあるよ。忘れたまま暮らしたかったなんて、それこそ忘れたくなかったってエ事の証じゃねエか」

——そんな都合の良い事は。

生きてる限り、出来やしねエンだよ、と少しだけ哀しそうな音を滲ませながら。

その深い赤の瞳が何を捉えているのか、草雲には図り知る事が出来なかった。

「雷封さん。私にはどうしても分かりませんよ」

ぼつりと、独り言のように口から漏れたその呟きを聞き、赤毛の青年は顔だけを草雲の方へと向けてみせる。

「私は、珪宋さんの気持ちが少しだけ、分かるような気がしていたのです。大きすぎる父の影と期待を常に感じながら生きていくという事が、どれ程辛いのかという所では共感すら出来るかもしれない

と思いました。けれど、何故ここまでしなければならなかったのです？ 影を断ち切る方法は、他にいくらでもあったのでは無いのですか？」

あるだろうなア、と、赤毛の青年は答えた。

「ただ、見つけられなかっただけ、なんだろうな。不安材料を消すなんてなア、一番確実だがこの場合は一番選んじやいけねエ逃げ道じゃねエか。それにすぐりついちまうだけ、青戸珪宋が弱かったってエ事だよ」

「あつさり、言いますね」

「難しく言ったってどうにもなンねエだろ。難しく言おうが単純に言おうが、起きちまった事は変わらねエンだから」

「はあ……。雷封さんらしい答えですねえ」

「何だそりゃ。単純だっって言いてエのかよ」

「あ、いえ、そういうわけでは」

わざとらしく慌てて否定をした草雲を雷封はじとーっと見つめていたが、ふいつと目を逸らした。

「人間だ鬼だっって言ってもよ。そんなモンはタダの種族の違いであつてさ。結局は、同じようなモンなのよ。同じように泣きもするし笑いもする。見た目が違うなんて、些細な事じゃねエか」

それは確かに正論だと、草雲も思う。

だが、正論がいつも通るとは限らない。皆が皆、雷封のように人に在らざるものと直接接しているわけではないのだから。

見た目が違う。種族が違う。

ただ、それだけで。

畏怖の対象になり得てしまうのだという事もまた、理解出来るのだ。

形の無い恐怖ほど、恐ろしいものはない。だから、人は皆、恐怖に明確な形を求めてしまう。

今回はそれが沙雪であり、沙雪の母親だっただけの話。

——人ではない。

ただ、それだけの理由で。

——ヒトは皆己の心に鬼を飼い、真実の鬼を目覚めさせる。
そう、頭の中では理解出来ていたのだ。

納得は、していなかったとしても。

「……妖とは、一体何なのでしょうかねえ……」

その呟きは誰に届く事も無く、空に昇って儚く消えた。

桜鬼・後日談

「結局、タダ働きだったワケだなア」

勝手に住処にしている荒寺の縁側にぼけつと座りながら、雷封がぼそつと呟いた。いつもの、毒がある口調では無い。誰に向けて言っているのでも無く、ただ気がついたら口に出していたという程度の呟きだったのだが、仕事を頼んだのが自分な手前、草雲には酷く耳が痛かった。

「まア、しょうがねエツちゃアしょうがねエしなア」

「……すみません」

「アア、いや？ 別に先生にどうこう言ってるワケじゃねエンけどさ」

「……はあ」

流石の俺も、仏さんだらけの村の家を勝手に家探しするってエのは気が引けるしよ、と、それこそ草雲が考えてもいなかった事をさらいと言い。

「それで？ 今日はい体何の用で」

「矛先を、変えた。」

心の中でほつと胸を撫で下ろし、霜雪さんは？ と問う。

「あいつは紫音寺に居るぜ。仕事が無い時ア大体あそこに籠りつきりさ。まア、今のあいつにやあそこが家なワケだから、何も不思議はねエワケだけだよ」

紫音寺。首都の外れにある小さな寺だ。何故か無駄に、こういう事だけは良く覚える質なのである。

「——で」

「ちりん、と鈴を指で弾き。」

「何が、聞きたい？ 何だかいなくてほつとしたって顔に見えるんだが」

興味が無さそうに鈴を指で弄びながら、彼の方を見もせずにはそ

りと言った。だが、その行動とは裏腹に、問い掛けた声音には探るような響きが伴われている。

「言っておくが。あいつに何かあいつ自身の事を聞いたって全くの無駄だぜ。あいつは自分の事を話すのは嫌いだし、そもそも話そうとしても話せないのさ」

「……話せない？」

兄弟同士、お互いの事を聞くなとは同じような事を言つと頭の片隅で考えながらも、丁度上手い具合に話が進んでくれた事に密かに感謝する。

これを逃す手は無い。少々緊張しながらも、慎重に質問をする。

「話せないとは、どういう事です？」

「あいつア……霜雪には、記憶つてヤツがねエンだよ」

「は……？」

何処か、遠くを見るような目をして荒れ放題の庭を見つめながら、雷封が言う。そういえば今日は、草雲の方を全く見ようとしていないという事に、彼はふと気が付いた。

「あいつにや他人に語るだけの昔がねエ。過去つてヤツがねエんだ。だから、あいつにあいつ自身の事を聞いたって分からない——そういう、事さ」

だから、なのかねエ——。

およそ彼らしくない、覇気の無い声で言い。

「あいつが、強引にでも沙雪を封印する芝居を打つと言い張ったのは」

過去が無い人間には。

過去に縛られて生きている人間の感情が、解らないのでは無いか――。

多分、この青年はそう言いたいのだろう。彼は彼なりに、弟を止められなかった事を悔やんでいるのだ。だけど。

「……それは、違ふと思いますよ」

「違うのかねエ」

「ええ。違います」

「珍しいねエ。草雲先生がそんなにはつきり断言するなんて。こりやア、明日の天気は雨だろうよ」

淡々と、抑揚の無い憎まれ口。

彼が草雲の方を見ないから、草雲も彼の方を見ずに色々思考を巡らせる。

霜雪が。

あの少年が、ムキになったのは。

ただ――。

――兄に対する、劣等感。
コンプレックス

普段はおちゃらけている兄の、いつも不真面目に見えるこの赤毛の青年の中に時折見え隠れする、一本きちんと筋の通った部分。それはある種の、覚悟のようなもの。

そんな部分に負けたくなくて。

しばしば感じる、霜雪の余裕の無さは確かに自分で自分の事が解らないという事も関係しているのだろう。だが、それより何よりもこの兄の存在の方が大きく関わっていると、何故か草雲には思えるのだ。

劣等感とは、強い憧れを抱かねば生まれない感情だから。
コンプレックス

ああなりたい、こうなりたいと願う、憧れと羨望の裏返し的情感。そんな、単純だが底の見えない深い感情に惑わされ、あの聡明な少年は判断を誤ったのだろう。雷封が、そこに気が付いていないとは正直思えないのだが彼の事だ。案外、誰でも気が付くような簡単な事を見落したりする可能性は無くもない。

だから、草雲はその考えを自分の心の中だけに押し留め、代わりに別の答えを口にした。

「霜雪さんも記憶が無いのなら、確かに過去に縛られて生きている人間の気持ちは分からなかったかもしれない。でもそれは逆に、記憶が無い人間、過去が無い人の気持ちなら分かる、という事にな

るのではないでしょうか」

「……沙雪の気持ちなら分かったと、そういう事かい？」

「ええ。私は、そう思います」

「なるほどねエ」

見方が違うつて事か、と黒衣の青年は呟いて顎を撫でた。

「……ま。今更あれこれ考えたつて、どうしようもねエ事だアな」
そう、何かを吹っ切るように言い。

「で、先生。霜雪に対しての疑問は、解消されたのかい？」

と、さらりと訊いた。別に何も悪い事をした訳では無いのに、思わず反射的にびくりとする。

「え？ あ、はい、まあ」

「あいつが何でもかんでも首を突っ込みたがるのも、他人が触れられたくねエって思ってるところまでずかずか踏み込んでいくのも。

ありやア記憶が無いからつてエ好奇心じゃなくて、元々のモン、生来の性格つてヤツだと思うんだがなア」

本人が聞いたたら、一体何と言つて三倍返しを食らわせる事か。

そんな事は、考えるだけで恐ろしい。

「性格なんてよ。そんなに簡単に変わるモンじゃアねエだろ」

「簡単つて言いますけど。記憶が無くなるつていうのはあちらこちらに転がっているような事じゃ無いと思いますよ。私だつて、まさかそんな理由だと知つていたら——」

「……知つていたら？」

そこで雷封は、初めて草雲と視線を合わせた。にんまりと、してやったりとした表情が、そこには浮かんでいる。

「そんな事ア、あいつに面と向かつて訊けやしねエわな。あいつの質問攻め、容赦無かつたんだろう？」

いッつも、容赦ねエンだよ。

——残念ながら。

大袈裟にため息をつき。

「見た目があんなンだろ？ アレで油断させておいて、いざ仕事に

なると自分が納得するか相手が干からびそうになるまで容赦しねエわけよ。ありやア、質問される方は勿論、見てる方だってびっくりするわなア」

「じゃあ、いつも」

「ああ。いつも、あの調子だ」

だからよ。深い意味はねエと思うぜ。
そう続けて。

雷封はすつと右手を草雲の方へ差し出した。真意を量りかねて、草雲は首を捻る。

「あいつの記憶がねエ事は、あいつにとって誰にも言えねエ最高の秘密なんだよ。そんな事、勝手にぺらぺら喋ったと知れたらどうなるか……。考えたただけでおっかねエ」

わざとらしく、ぶるぶる震えて見せたりしながらの、台詞。

「……つまり、えーと」

何となく、彼が言いたい事は予想がついた。予想はついたが、自分からは言い出したくは無い。自分で口に出してしまったら、それこそ逃げ道が無くなってしまふ。

それぐらいは、多少なりともこの青年……否、この兄弟と付き合いがあれば分かるというものだろう。

雷封は不自然ににこやかな笑みを浮かべて、草雲を上目遣いに見た。

「そんなおっかねエ思いをしてまで教えてやったんだ。これでタダつてエのは、虫が良すぎるンじゃアねエのかい、草雲先生？」

教えてやったも何も。はつきり訊きもしないのに、勝手にぺらぺら喋ったのは雷封さんじゃないですか。

その台詞は残念ながら、心の中でのみ綴られる事となった。

——やっぱり。この人達と関わりを持ったのが間違いだったんだろっか。

付き合えば付き合うほど軽くなる財布を抱え。

でもまあ、これも運命ってやつなんでしょうかねえ、と口の中で

眩いて、草雲は苦笑いを浮かべたのだった。

桜鬼・後日談（後書き）

後書って必要なのかどうか分かりませんが（毎度迷うのです）、まずはご挨拶。

ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございました！何と言いますか、ホントに如何ともし難いお話なので載せるのもどうしようかと考えていたお話なのです……。ホンのちよろりとても心に残るトコロが御座いましたら本望です……。 （弱気）。

和風ファンタジイと言っておきながら、ファンタジイらしい場所が何処にもありませんこの話。中篇連作という事で、一話一話でも読めるようにはなっておりますが、微妙に繋がっている部分も御座います。大きな部分では、雷封の力と霜雪の過去ですが、その辺もちまちまと書いていけたらな、と。まだ出ていないメインキャラもいますし。

ああ、本当、後書って何を書けば良いのか。内容に触れば触れる程、言い訳になってしまいそうなのでそこら辺は割愛致します。基本的にこんな感じで派手に術が炸裂するワケでも無く戦闘シーンがあるワケでも無く。がつつりハッピーエンドでも無ければ凹む程のバッドエンドにもならない不思議な話ばかりだと思いますが、ヒマ潰しにでもお付き合い下さると幸いです（ぺこり）。

閑話・初めての祭り（前書き）

登場人物の日常を描いた読み切り短編です。

次の話から登場する人物等もありますが、なるべく「桜鬼」本編を読み終わってから読んで下さると助かります。

閑話・初めての祭り

「……ふうん。雷封が、あたしにコレを？」

手渡された手紙を何度もじつくりと読み直した後、椿は怪訝な表情を浮かべてそう呟いた。

「何だか急な用事だから、あたいに返事返して欲しいって」

「……ふうん……」

目を細め、まるで値踏みでもするように目の前の白髪の少女を見やる。じろじろと上から下まで見つめられ、沙雪は少し気恥ずかしくなった。ぎゅっと膝の上で握った拳に力が入る。

そんな少女の様子に気が付いたのだろう。椿はすっと視線を窓の外へと移し、ふうつと煙管の煙をゆっくり吐き出した。窓の外の、今はまだ静けさを保っている煌びやかな世界がほんの少しの間だけ霞が掛かったように鮮やかな色を失い、酷く曖昧な薄ぼんやりとした世界になる。

「まあイイさ。あの甘ちゃんにあたしも付き合ってあげるよ」

その答えを聞き、ほっと安堵の表情を浮かべた少女に向かって。

「ただし、あんたにも付き合ってもらう事になるからねエ。覚悟は——出来てるかい？」

予想外の台詞だったのだろう。固まった沙雪に向かって、そうと決まったら忙しいよオと楽しそうに言い放つと椿はすっと立ち上がる。いつも通りの紅い唇にはこれもいつも通り心の読めない不敵な笑みの他にほんの少しだけ、懐かしむような淡い色が重なっていたのだがそれも一瞬。

もう一度深く煙管の煙を吸い込んで、椿は心の中で呟いた。

——全く。

結局はあたしだっておなじ甘ちゃんじゃアないか。

そんな遣り取りより少し時間が経った頃。

夕暮れ間近の首都外れで、種田草雲と千花の兄妹はある人物を待っていた。都の外れなどそもそも人通りが多い場所では無い上、かなり陽が傾いているこんな時間にもなるとほとんど通る人はいなくなってしまう。その為、かなり閑散とした雰囲気が漂っていた。

「こんな所呼び出して、一体何の用だったのよ」

妹がこの台詞を口にするのはこれで三度目だ。呼び出した相手が相手だけに、お目当ての人物が到着するまで一体何度同じ台詞を聞く羽目になるのだろうと草雲は内心苦笑する。

「わざわざ格好まで指定するなんて。本当、何考えてるのかしら」
続くこのばやきも三度目だ。最初の疑問はともかくとして、後者の疑問は別に構わないのではないかと草雲は思う。

今日の妹の格好は普段の赤い袴姿ではなく、桜色を基調に白で雲の模様が入った大人しい着物姿だ。髪の毛もいつものように無造作にゆるくお下げにしてあるのではなく、着物と同じ色の結び紐で高く結び上げてある。つまりは、同じ年頃の少女達がしているような普通の女の子然とした格好なのだ。草雲などから見ると、それに取立てて腹を立てるような問題があるとは全く思えない。

「普通の格好をする事に何か問題でもあるんですか？」

「無いわよっ。普通の女らしい格好、って指定された事がム力つくの」

しかも、何であたしだけなのよ、と隣で苦笑いを浮かべている兄を見上げる。草雲の方はいつも通りの少し草臥れた色の上下に浅黄色の陣羽織を羽織っている見慣れた格好だ。

「まあ……私に、女らしい格好と言われても困りますから」

「そういう事を言ってるんじゃないわよっ」

かつと頬を紅潮させて言葉を叩きつけるとぷいっと横を向いてしまった。これで余計な事は話さずに済むと、草雲はほっと胸を撫で下ろす。

……全く。

千花にバレないようにだなんて無茶な注文ですよ。

実の所、草雲は雷封から何をするつもりなのか全てを聞かされた上で妹を連れ出したのである。赤毛の青年が仕掛けようとしている事に異論は無かったし、むしろ大賛成でもあったので彼は青年に言われたままの台詞を妹に伝えたのだ。その中に確かに件の台詞はあったし、それを気がつかずにそのまま伝えたという事も今考えてみればそれぐらいどうとでも言いようがあったのだと思ったたりもするのだが、今更考えたって後の祭りである。妹の機嫌が直るわけもない。それにそもそも、千花の機嫌が悪いのは呼び出したのが雷封である、というところに起因しているので着物云々というのは後付けの理由であらう。

まあ、何にせよ。

理由が分かるまでの辛抱ですから。

呼び出された訳が分かれば妹の機嫌は直ると、草雲には自信があった。何をするにしても自信を持てない彼にしてはとても珍しい事であるが、確信があると言い切っても良いぐらい、確りとした自信があつたのだ。だからこそ、機嫌が悪くなると分かっているのにも関わらず、妹を連れ出す事に協力したのである。

……それに。

見てみたいものも、ありますし。

理由が分かれば、千花は笑ってくれますよねえ。

ひょっこり再会してからというものの、以前より妹に会う機会は格段に増えた。その事自体はもちろん嬉しいのだが、いかんせん草雲と居る時の妹は怒ったような（実際怒っている事も多い）怖い顔をしている事が多く、常にぴりぴりしているように感じられる。それもまた、ついさっきの着物と同じ所に原因があるのは分かり過ぎるぐらいはつきりと分かっているのだが、草雲としてみればそのお陰で妹と会う機会が増えているという事実もあるので心苦しい事この上無い。

つまり。

赤毛の青年の仕掛けを手伝う事によって千花と会う機会は増えたものの、妹がその青年を毛嫌いしている為、青年と仲が良い（ように見える）草雲にもツンケンした態度を取るという悪循環なのだ。お陰で妹の不機嫌な顔ばかり見る羽目になってしまい、嬉しいんだか悲しいんだかよく分からない気分になまってしまおう。

——それにしても。

雷封さんがいない時まで、不機嫌な顔をしていなかったって良いでしようにねえ。

ふいつと横を向いたまま自分の方を見ようとしてもしない妹にちらりと視線を走らせた後、諦めたように小さく頭を振ると都の方へと視線を移した。

「……あ」

視線の先に見慣れた人影を二つ見つけて、思わず声を上げる。

一人は、いつも通りの黒い法衣を細身の身体に纏った茶色い髪の少年。

そして、もう一人は――。

少し恥ずかしそうに俯き加減で歩いて来る少女の姿を確認し、知らず知らずのうちに草雲は微笑を浮かべていた。一生懸命怒った顔を続けているように見える妹の肩をトントンと叩く。

「……ほら。待ち人が到着しましたよ」

「何よ、人をこんなに待たせて。全く良い御身分じゃ――」

刺々しい響きを持った千花の台詞は最後まで吐き出される事は無かった。少年と一緒に到着した少女の姿を見、千花の瞳が大きく見開かれる。肩に掛かった髪を払おうと手を掛けた体勢のまま、固まっていた。

「……沙雪、ちゃん？」

目の前の少女を確かめるように何度か瞬きを繰り返した後、やつの事で喉の奥から搾り出した声は小さく掠れていた。他に、どんな言葉を掛けていいのか上手い言葉が見つからないから名前を呼んだ、そんな風に聞こえる棒読みの呼び掛け。

小さく頷いた少女の格好は、いつもの見慣れた活動的な着物とはかけ離れた浴衣姿だった。紺色の浴衣に黄色い帯が映えている。髪型も多少いじっており、高い位置で束ねたものをそのまま団子にしていた。何故だか、今にも泣き出しそうな顔をしているように見えるのは草雲の見間違いだろうか。

千花が目を見張るのも無理は無い。予め、計画を聞かされていたはずの草雲ですら、法衣の少年と一緒に現れたのが沙雪だとは一瞬思わなかったぐらいなのだ。少女の特徴である尖った耳を確認するまでは、実は違う人物なんじゃなかるうかと考えたぐらいである。

女の子は化けるって言いますからねえ。

「……やっぱり……似合わない、よね」

沙雪は俯いたまま、やつと聞き取れるぐらいの小さな声で言った。沙雪も沙雪で、一体どんな表情をしていたら良いのか分からないから下を向いている、そんな心境なのだろう。その心境を察し、千花は慌てて首を左右にぶんぶんと振る。

「そ、そんな事無い。ただ一寸、吃驚しちゃっただけ」

あたし、違う奴が来ると思ってたから、と続けると千花はにっこりと優しい笑みを浮かべて言った。

「浴衣、凄いい合ってる。可愛いよ」

「……そう、かな。あたい、こんな格好した事無かったから……」
分かんなくて、椿さんを選んでもらったの、とぼつぼつと話す。

「今日は、八頭村^{やず}で龍神様を祀るお祭りがあるんですよ。あまり大きなお祭りではありませんが、炎をまるで龍のように自由自在に操る火芸が有名でしてね。その火の粉を被った者は龍神様の恩恵が得られ、幸せになれると言われています」

「ですからね。兄さんが言い出したんですよ。沙雪は今までお祭りに行った事が無いだろうから、うんとおめかしして連れて行ってやるうつて。全く、自分は龍神様を毛嫌いしてるって言うのに、一体どういう風の吹き回しなんだか」

二人の説明を聞き、千花はぽかんと口を開けた。

……それじゃあ。

「それですね。一人だけおめかしじゃあ気まずいだろうから、千花もなるべくそれらしい格好で合わせて欲しいって頼まれたんですよ。やっぱり男より同じ女の方がいいだ——」

「それなら！ 最初ツからそう言ってくれば良かったじゃない！

あたし、一人で怒って一人で訳分からなくて——」

あたし一人、馬鹿みたいじゃない。

その台詞はおろおろしながら千花を見ている実兄に叩き付けられる事無く飲み込まれた。これでは本当にただの八つ当たりだと気がついたからだ。

すうつと一つ。深呼吸をした。夜の帳が下りようとしている曖昧な時間のひんやりとした空気をたつぷりと胸に吸い込むと、不思議と気分が落ち着き頭の中が鮮明になる。

「——つまり。あたしにも内緒にしるって言われたわけね、兄様」

「ええ、はい、まあ、えーと……そういう事で……」

「何も言わないのはいつもの事、なんでしょ」

ほっとしたように情けない笑みを返す草雲を一瞥し、ため息をついた。そのまま、小さな身体をもっと小さく縮めてしまっている沙雪へと視線を泳がし、ふうつと大きいため息をつく。

「分かったわよ。あいつの提案に乗るってのは気に食わないけど、仕掛け自体は悪い事じゃないから乗ってやるわ」

認めたくないけど。

「あたしだつて——同じ事をすると思うから」

何回言っても言い足りないくらい癪だけど。

そんな心の声は多分、草雲にしか届かなかつたに違いない。が、とりあえずでも何でも乗ってくれると言う妹の機嫌をまた損ねる事も無い。だから草雲も聞こえなかつた振りをする事に決め、影でほつと安堵のため息を漏らした。

「……それで。その言いだしっぺは何処にいるのよ」

「そつえば、見当たりませんねえ」

「ああ、兄さんは来ませんよ。龍神様を毛嫌いしているって、言っただでしょう」

何だッて龍神を祀る祭りなんかに行かなきゃなんねエのよ。お膳立てはするけどよ、沙雪を連れてくのはお前らの役目だぜ。

真逆、俺がいねエと祭りで盛り上がる事も出来ねエわけじゃねエだろ。

いつも通り淡々と、でも何処かしら血の繋がらない兄の口調を真似ながら彼の台詞をなぞってみせた少年の言葉を聞き、千花は呆れた、と呟いた。

それを耳にした少年も、兄さんの行動で呆れるのはいつもの事です、と淡々と返す。

毛嫌いしているという事実も確かにありますけどね。

「あれは——単純に顔を出すのが恥ずかしいだけですね」

「何よそれ。恥ずかしがってる事自体恥ずかしいじゃない」

「俺力ツコいい事したな——とか勝手に思ってるんでしょ」

「……うっわ。ホント恥ずかしい」

「ええ。本当に恥ずかしいです」

そんな二人のやり取りを見つめながら、草雲は未だ居心地悪そうにもじもじしている沙雪の肩にぽんと手を置いた。小さな肩が一瞬びくりと強張るのが手のひらに伝わってくる。

「何も、遠慮する事はないんですよ。お祭りぐらい、誰だって行くんです。お祭りに行って楽しむ事ぐらい、誰だってして良いんですよ」

「でも……あたいは」

「いいんです。お祭りってというのはそういうものなんですよ」

しゃがみ込んで沙雪の深い緑色の瞳を覗き込む。

そしてほわっと、少し情けない見慣れた笑みを浮かべた。

それにつられたのか、沙雪もようやくと笑みの形に顔を歪める。

「……分かった。楽しむ事にする」

「そう、それでいいんですよ」

もう一度ほわつとした笑みを浮かべて肩をぽんつと叩くと、草雲は立ち上がった。いつの間にやら妹と少年の話は終わっていたようで、二人は少し離れた場所から彼らを眺めている。草雲が立ち上がったのを見、千花が彼らに向かって手招きをしていた。
まあ。

妹の、満面の笑顔は見られませんでしたけどねえ。
それが一寸心残りだなと心の片隅で考えながら。

「——それでは、お祭りに出掛けましょうか」

第二幕／夢織人・序章

タンタントントン、タン、トントン。

夢織人は、夢を織る。

つらつらつらつら、夢を織る。

丹精込めて織り上げて、

今宵は誰に、見せましょか。

タンタントントン、タン、トントン――。

どうにも、落ちつかない。

わいわいがやがやと人々の活気に溢れる大通り。絶える事の無い人の流れを見つめながら、種田草雲たねだそう'unは苦笑いを浮かべていた。

季球の首都、桜嶺さくらねの中心部に位置する大通り。その通りが見渡せる橋の上から、緩やかな水の流れだけでは無く、人の流れも一緒に見つめながら、草雲は何だか居たたまれない気持ちを抱えて待ち合

わせをしているわけである。

「お、先生。きちんと時間通りに来てるたア、感心だねエ」

そんな軽い声が後ろから掛かった。クセのある赤毛に黒い着物の見慣れた顔を見、ほっとするやら気合が抜けるやらで、「そんな当たり前前の事言わないで下さいよ」と呆れたように言う。

「大事な用があるって呼び出したのは雷封さんじゃないですか。いつまで待っても来ないから、担がれたかと思いましたよ」

「先生騙して何の得があるよ。俺だって暇じゃねエのよ？ 遅れたのは悪かったけどさア、色々やる事もあんのよ」

「いえ、まあ。私も別に、何か用事があつたわけじゃありませんから」

そう言われると特に反論も出来ない辺り、本当に自分は押しが弱いなあなどと心の中で苦笑いを浮かべつつ、草雲は本題に入った。

「それで、私に用事とは一体何なのですか？ 雷封さんから私に用事があるなんて、珍しいじゃないですか」

それを聞いた雷封が一瞬、複雑な表情を浮かべたように見えたのは草雲の見間違いだろうか。

ちらり、と嫌な予感が顔を覗かせる。

「ん？ ああ。まア、実際用事があんののは、俺じゃねエんだけどさ」
先生に、会いたいッてエ人間がいるのよ。

突然、きやあ、と橋の向こうで悲鳴が上がった。それに続いて金属同士がぶつかり合うようなキン、という高い音も聞こえて来る。

「な、何でしょう」

「さア？」

ばたばたと逃げて来る町人にぶつからないように気をつけながら、草雲は騒ぎの中心へと目を凝らした。

どうやら、五、六人の剣客が斬りあっているらしい。ちらちらと見え隠れする赤い袴の小柄な剣客が一人で応戦しているように見え

るが、動きが速い為戦い慣れしていない草雲の目にはそれ以上の事ははつきりと見て取れなかった。それでも何とか状況を把握したいと目を細めたりしてみるが、もちろん効果は無い。

そんな時。

ちらりと、目の端を掠めた純白の着物。

戦いから目を逸らし、その着物の人物に目を移した瞬間。

草雲は、術にでも掛かったかのように相手から目を離せなくなっ
てしまった。

赤い袴の人物に守られるように佇むその儂げな姿。

戦いが巻き起こす風になびく、淡い桃色の髪。

「おーおー。昼間っから元気なこったねエ」

隣から、のん気に野次馬をしている雷封の聞き慣れた声が聞こえ、はつと我に返った。欄干に腕を乗せ、身体を預けるような格好で呆れたように騒ぎを見つめている赤毛の青年に、「落ち着いてる場合ですか!」と思わず怒鳴ってしまう。

「助けなくて、良いんですか!?!」

「何でそんな面倒くせエ事する必要があんのよ。関係無いトコロで勝手にやってる喧嘩じゃねエか」

「そんな! だって、どう見たって多勢に無勢じゃないですかっ!」

「まあ、苦勞してるみてエだけど。でも強いぜ、あの子」

「そーゆー事じゃなくて! ほら、女性を守るのはこの世界が出来てから、いや出来る前からもしてこれからも永遠に男の最も大切な使命だつて決まってるというのはこれ以上無いという程常識中の常識じゃないですかッ!」

「……は?」

一瞬、時間が凍りついたと思ったのは決して草雲の思い込みでは無いだろう。目を点にして、まるで未確認生物でも見るように自分を凝視している雷封を見、草雲は身体中の血が頭に昇って来たんじゃないかと思う程顔が熱くなるのを感じる。

ああ、出来るなら、川の水で頭を冷やしたいですよ。

「あ、いや、その、ですね。ほら、やっぱりその……ですね」

「……ツケといてやるよ、先生」

ポン、と肩に手を置いて。

奇妙に素直な笑みを残し、傍らに立てかけてあった錫杖を持つと軽い足取りで橋の向こうへと向かった。

戦いは、呆気無く決着がついた。

「はい、これで終わり」

どさりと重たい音を立て、男の身体が地面に崩れ落ちる。ふう、と一度大きく息を吐き、草雲の所へ引き返そうとした時だった。

——キン。

辺りに響く冷たい金属音。

「……助けてやったのにさア。コレは無いンじゃねエの？」

「黙れ。助けてくれなんて頼んだ覚えは無い」

振り上げた錫杖の柄に、曇りの無い輝きを放つ刀が当たっている。それを握っているのは、まだ年若い少女だった。

少女は刀を引かぬまま雷封を睨みつけ、強い口調で言う。

「それに、お前も刺客じゃ無いと言い切れない。敵の敵は仲間だとは言い切れないからな」

「そりゃ、ご尤も。俺も、そう言われると思ってたんだけどさ」

あんまりに、連れがうるさいモンだからね、と雷封は大袈裟にため息をつくとき空いている右手で橋の上を指差した。橋の上には、この展開にわたわたしている草雲が見える。

「だからさ。文句なら、連れに言ってくれる？俺はね、加勢してやってくれッて頼まれただけなんだからさア」

連れ？ と呟いて橋を見た少女の顔が、驚きの表情に変わる。

「……兄様」

その一言に、今度は雷封が目丸くする番だった。

「……兄様、だア？ 先生さっき、そんな事は一言も」

そこまでばやき、先程の草雲の様子を思い出して思わず苦笑いを浮かべる。

あんな状態じゃ、周りなんか見えてなかったんだろうな。

「で。俺の依頼主がアンタの兄さんである事も分かったんだし。俺が真光寺翡翠の命を狙ってるワケじゃねエってのも分かっただろ？ いい加減刀引いてくんねエかな」

「な……っ。どうして、翡翠様のお顔と名前を知っている？」

「あ……な……」

「千花さん。その人は、嘘を言っていますよ」

雷封に皆まで言わせず、少女の後ろから掛けられた柔らかな声。その一言で、千花と呼ばれた少女は渋々ではあるがとりあえず刀を収めた。それを見て、草雲も急いでこちらへやって来る。

「ほ。一応、助かったと礼を言っておくべきなのかな」

「いいえ。それは私の台詞です」

聞く物皆を安心させるかのような穏やかな声で真光寺翡翠は言い、無駄の無い優雅な動きで一礼した。雷封は面倒臭そうに冷めた顔をしてそれを眺め、イライラした様子でがしがしと頭を掻く。

「悪インだけどさ。俺、堅ッ苦しいの嫌いだから」

「雷封さん！ 何て事を言うんですかッ！ この方に失礼じゃないですかッ！！」

鼓膜がびりびりと震えそうな程の大声で草雲が抗議した。堪らず耳を押さえ、このセンセ、こんなに大きな声が出せたのねと中々に失礼な事を考えながら、斜め後ろの方で自分をじとーっと冷ややかに眺めている妹も目に入っていない様子の草雲に話を振った。

「だってよ。俺は先生に頼まれて手を貸してやってただけじゃねエか。だからよ、俺が礼言われんのは筋違いだろ？」

「あ、いえ、そんな」

照れンなよ。

うつかり突っ込みそうになったトコロをぐっと堪える。ここで先生を凹ませてしまったら、この堅苦しい女にもっと付き合う事にな

ってしまう。

……ッたく。

先生の様子が面白エからって一寸付き合ってやったら。

よりにもよって、真光寺翡翠かよ。

こんな事になるんだったら、もう一寸身を入れて状況を見ておくべきだったと悔やんだところで後の祭りである。てつきり、斬った張ったしている妹の方（その時は妹だと知らなかったのだし）に見惚れているものだとばかり思っていたのだ。

時間を戻せないのなら、いかにしてこの状況から脱するか、それを考えるのが得策というものだろう。

「そんなワケでさ。礼を言うなら先生に言ってくれ。俺は、この先生に頼まれて渋々手を貸しただけなんぞでね」

そう思い、手っ取り早く草雲に押し付ける事にする。真光寺翡翠とは関わりたくない。それが、雷封の本音だった。

「でも、お二方が助けて下さった事に変わりはありません。助かりましたわ」

「いやあ……。私は何もしていませんが……」

「……ホントにその通りよね、兄様」

「……へ？」

目の前の翡翠でも無く。傍らで呆れたように自分を見つめている雷封でも無い。斜め後ろから掛かった全く予期していなかった声に、草雲は一瞬で現実に取り戻された。

……な、何で。

「何で、千花がここにいますッ!？」

「それはこっちの台詞よ。だらしく鼻の下伸ばしちゃって、見つとも無いったら」

「み、見つとも無いは、余計です!」

恥ずかしいやら居心地が悪いやらで顔が赤くなったり青くなったり忙しい。多少むくれている様な、およそ草雲らしくない表情を浮かべ、しらーっと自分を見上げている妹を見る。

「それで。どうして貴女がここにいます」

「仕事よ、仕事。あた……私は、翡翠様がお出掛けになる時の用心棒ってわけ」

「翡翠、様？　もしかして、……し、しんこうじ、ひすい……ッ！？」

「……気付いて無かったのかよ」

心底呆れた口調で雷封がぼやく。全く、おめでたいねエと口に出さずに続け、大袈裟に肩を竦めた。

「え、いや、だって、ほら。……ねえ？」

真光寺翡翠と言ったら、ここ季球では知らない者はいないだろう。代々、季球を導く神託を授かるという真光寺の娘にして歴代の巫女の中でも特出した能力を持つと言われる、美しい盲目の巫女。

そんな重要人物とこんな街中であっさり出会っちゃうなんて誰も思わないじゃないですか……ッ。

……もももしやこれは、運命……？

いやいやいや、そんな、真逆。

頭の中でごちゃごちゃと色々考えたり程よく脱線したり口ではよく分からない事を口走ったりしながら、結局は気になって遠慮がちにちらちらと翡翠の顔を見てしまう。それを感じたのだろう。翡翠は、自身の髪の色と同じ淡い桜のような笑顔を草雲に向けた。

「千花さんのお兄様？」

「え、あ、はい。草雲と申します。一応、そういう事になるかと……」

……

「一応って、何なのよ」

ぼそりと突っ込んだ千花の言葉に翡翠はくすりと笑い。

「初めまして。真光寺翡翠と申します。千花さんには、よくお世話になっておりますわ」

「いや、えと、何だか、こちらこそお世話になっているようで」

「そんな事はありません。千花さんにはお話相手になって頂いたり、本当に色々とお世話になっているのですから。……そうだね。」

千花さん、今日はこの辺りで構いませんから、お兄様と少しお話でもしていらつしゃったかどうかしら」

「……え、でも」

「ここから真光寺は然程遠くありませんし。積もるお話もあるのでしよう？」

積もるお話なんてあるの？ という顔で妹を見たのだろう。千花はバツが悪そうにぷいっと草雲から目を逸らした。お陰で、何となく行き場を失った視線を雷封に合わせてみたりするが、彼の弟ならともかく、この赤毛の青年が助け舟を出してくれるはずも無い。「勝手にしろ」と身体全体で訴えかけられているような気にする、なる。

案の定。

「まあ、先生の好きにしてもらって構わねエけどさ。ただ、何時になつても構わねエから、先生一人にでも今日の用事さえ果たしてもらえりやアよ」

「確か、私に会いたいという方がいらつしゃるのでしたねえ」

「ああ。別に迷うような場所でもねエし。先生の名前を言えば、分かるからよ」

「じゃあ……」

お言葉に、甘えましようかねえ、と草雲は呟き。どうやら積もるお話があるらしい妹へと視線を移す。彼女は心配そうな表情を浮かべ、翡翠と倒れている刺客とを交互に見比べていた。

「……やっぱり、心配ですよね」

こんな昼日中、堂々と街中で襲つて来るような連中がいるというのに、一人で真光寺まで帰すなんて。

じいーっと、自然に視線が一所に集まる。

視線の先にいるのは、何とも面倒臭そうな顔をした、黒衣の青年。

「……おい」

「アンタさ……。手を出したからには最後まで責任持ちなさいよね」

「あのなア……。そりゃむしろ先生に言っただけ欲しい台詞だぜ？」

「雷封さん、お願いしますよ。別に良いじゃないですか、減るもんじゃなし。用事があるという方には、私が一人で会いに行きますから」

「頼んでもいないのに人の喧嘩に手を出せる程、強いんでしょう？
だったら、真光寺まで翡翠様を送っていくなんて簡単じゃない」

「……千花。もしかして、根に持ってます？」

「ううん、全ッ然」

「目が、笑ってませんよ……」

畳み掛ける様に言う兄妹から目を逸らし。儚げに佇む季球の巫女
を見やる。

よりもよって。

真光寺翡翠を、送る？

しかも、二人つきりで？

「何で」

そーなのよ。

その台詞は、雷封の心の中でのみ続けられる事となる。

夢織人・其の一

積もる話と言つても。

いざ改まつてみると、一体何を話せば良いのやら。

全く、困りましたねえと心の中で呟き、草雲は手に持ったお茶を一口喉の奥に流し込んだ。少し前に運ばれて来てから放置されていたお茶は熱くも無く冷たくも無い、所謂ぬるいと感じる温度になっており、熱いものが苦手な彼でも問題無く飲める程に冷まされている。

とりあえずと先程一悶着あつた橋から然程遠くも無い場所に店を構えた甘味処で一休みをしながら、何を話したモンかと悶々と考え込んでいたのである。ほぼ勘当状態である為、久しぶりに妹に再会したと言つても家に帰つて落ち着いて話をするわけにもいかず。だからと言つて、自分が執筆する為に使用（もちろん、住まいとして借りたのだが執筆している時以外は居ついた事が無い）している小屋に案内するのも何となく憚られたので、丁度良く目に付いたこの甘味処に腰を下ろしたのは良いものの、これはこれで二人並んで黙々と茶菓子を食べ続けるだけになってしまっている。どうにも、上手い話題と切つ掛けが見つからない。

案の定。

不機嫌そうな顔をして飴蜜をざくざくと突付いていた千花が、ぼそりと口を開いた。

「……で、兄様。一体いつから、あんなガラの悪いのと付き合つようになつたのよ」

「嗚呼。雷封さんの事ですか？」

「ふーん。雷封つて言つた」

ざくりと力を入れて白玉をもう一突き。

不機嫌そうな、では無い。これは、誰が見てもあからさまに不機嫌だ。

「ええ、ひよんな事から知り合いましてね。それ以来、何度か被い屋仕事に立ち合わせて頂いたりしているんですよ。まあ、立ち合わせてもらっていると言っても、単なる成り行きでそうなっているだけで、私はただそこにいただけなんですけどね」

「被い屋！ やっぱり胡散臭い事してるのね」

一言で切り捨てた。話題に上っている青年の義弟がこの言葉を聞いたら一体どんな反応をするだろうかと考え、草雲は苦笑いを浮かべる。

何とも、複雑な心境だった。妹の性格から言って、雷封と鉢合わせたならこうなるだろう事は想像に難くは無い。

というよりむしろ、予想の範疇である。そうなると自分が雷封に援護を頼んだ手前、何故先程戦っているのが妹である事に気が付かなかったのだろうと悔やんでみたり、でもだからと言って妹だと分かっていたら分かっていたでそれこそ放っておけない。つまり、どちらにせよ見て見ぬ振りは出来なかったよなあと一人納得してみた。

自分が助けられないまでも、困っている人にはどうにも手を貸したくなる性分なのである。それが、儚い女性であったり、自分の可愛い妹であったりするなら尚更見て見ぬ振りなど出来るわけが無い。……出来るわけは無いのだが。

妹と雷封をあのような形で会わせてしまったのだけはマズかったと、流石の草雲も思っている。千花はとにかく、人に助けられる事、人に頼る事を嫌う。つまり、素直じゃないのだ。だから、あの形で会ってしまうというのは雷封じゃなくとも一番避けなければならなかった事態だったのである。

ふう、と小さく息を吐き出し。隣で、相変わらず何かをぶつけるように餡蜜を突付いている妹を盗み見る。

小柄な身体。手の動きに合わせ、小刻みに揺れる緩く編んだ三つ編み。桃色の着物と紅色の袴。

そして、脇に置かれているのは、その小さな身体に似合わない、

立派な刀。

人を――殺める事も出来る道具。

――私の、所為ですね。

自分がこんな性格で無かったとしたら、妹がそんな道具を手にする事は無かつただろうと草雲は思う。彼女が剣を覚えたのは、剣を持つ事を拒んだ自分に代わり、実家である道場を継ぐ為になのだから。

女だてらに剣を振るう事。それが一体どれだけ彼女の負担になっているのか、草雲には計り知れない。真つ直ぐで負けず嫌いな性格故に、女だからと言われぬよう人知れず努力をして来た事を彼は知っている。それが実を結び、今では大の男と渡り合っても引けを取らない程の実力を身に付けているという事も。

だが、それを手放して喜んで良いものなのかどうか、草雲は計りかねているのである。

千花はまだ十七だ。だが、年頃の娘らしい格好もせず、そうした事に興味を持たない。ただ、強くなる事、それだけを目標に日々過ごしているのである。

だからなのか、自分より強い人間には過剰に反応するくらいがあるのだ。それは、羨望でもあり嫉妬でもあるのだろう。

先程の雷封への反応を見る限り。コイツには敵わないと思ったのに違いない。それが、妹の自尊心を傷つけてしまった事も悔やまれるし何より、妹をそんな立場に追い込んでしまったのが不甲斐無い自分なのかと思うと、どうにも居た堪れない気分になるのだ。積もる話も何も彼女に申し訳無くて、どうしようも無くなってしまふ。

どうしようも無くなって、ふう、ともう一度小さくため息を吐いた。手持ち無沙汰で口に運んだお茶は、すでにぬるいを通り越して冷たくなってしまっている。

「……翡翠様、大丈夫かしら」

「雷封さんが付いていますから。大丈夫ですよ」

「どうだか。別の意味で心配だわ」

あの男、いい加減そうだったし、と、これでもかと甘さを主張しているかの如く餡のたっぷり乗った団子を口に運びながら言う。おや、と思った時は後の祭りで、団子は千花のお腹に確りと収まってしまっていた。それは草雲がお茶と一緒に頼んだ物であったのだが、時すでに遅し。皿の上には、甘さを主張している黒々とした餡と、団子がそこにあつたのだという事を示す細い竹串だけが綺麗に並べて置かれていた。もちろん、先程まで千花が突付いていた餡蜜も、綺麗に平らげられている。

「まあ、雷封さんは確かにいい加減に見えますけどね。でも少なくとも、引き受けた仕事に関してはきちんとしてますから、大丈夫だと思いますよ」

「仕事に関しては、でしょ。今回みたいなのは報酬も出ないしあの態度だし。仕事だと思ってるかどうか危ういところだわ」

……報酬も出ないし。

もしかして、後からとんでもない額の手間賃をふんだくられるんじゃないだろうか。

……いや、そんな。

妹の皮肉にあまり想像したくない事を思い浮かべたりしながら、草雲はふるふると頭を振った。^{かぶり}妹の言葉を否定するというより、自分の脳裏に浮かんだその想像を振り払いたくて振ったようなものである。

「いや、いくらなんでも。大体、翡翠さんが襲われる場面に実際出くわしてるんですし、送るぐらいは真面目にやってくれると思いますよ」

「……ふーん。兄様、やけにあいつの肩を持つのね」

「肩を持つと言うか……。あの場面に出くわしておきつつ、翡翠さんを放っておけるような男は人として駄目です、ええ」

「……じゃあ、兄様が送って行ってあげればよかったじゃないの」
呆れた様に（実際呆れているのだろうが）言った千花の言葉に、私じゃ盾にもなりませんから、とあっさり情けない返事を返す。

「それにしても。昼間っからあんな街中で襲われるなんて、全く穏やかじゃありませんよ。一体、何が目的なんでしょうかねえ」

「……ああ。相手は、分かっているの」

「え……？」

千花はつまらなさそうにぼつりと、龍仙寺の連中の差し金よ、と言った。

——今までも、何度か会った事だわ。

「そんな。龍仙寺と言ったら、季球で一、二を争う程のお寺じゃないですか。そもそも、命の遣り取りに何だってお寺が出てくるんです」

兄の台詞を聞き、疲れたようにため息を吐く。

「あのね兄様。大きなお寺だから、に決まってるじゃないの。奴らからしてみれば、真光寺が邪魔なのよ。大して大きなお寺でも無いクセに、神託の所為で代々国の主様の檀家にもなっている、真光寺がね。だから、あの手この手で翡翠様を亡き者にしようとしているってわけ。翡翠様は特に神託を授かる能力が強いから、相手も余計に焦ってるんだわ」

「……そんな、でも……お寺、ですよ？」

「それでも結局。動かしてるのは人だわ」

吐き捨てるように言った妹の言葉に草雲は、言い知れない寂しさを感じる。それは確かに真実だけれど、彼にはそれ程割り切って考える事は出来ない。どうしても何処か、職業と言う壁に、そしてそれに縛られる人間というものに期待してしまう。

「もちろん、非公式な情報ではあるんだけど。でも、あたしみたいなのも非公式に雇われてるわけだし、確実な証拠が無いまでも完全にガセって事も無いと思うわ」

いつの間に頼んだのか、追加の餡蜜を受け取って口へ運びながら千花は言った。あああ、そんなに甘い物ばかり食べては太りますよと思わず呟き、じろりと突き刺さりそうな鋭い視線で睨まれる。小さく首を縮めながら、意外と地獄耳なんですねぇと今度は心の中で

のみ苦笑して、別の質問を口にした。

「非公式に雇われてるって。そうなんですか？」

「ええ、そう。きちんとした公式の外出の時は、警備だってきちんとしたのがつくから。あたしは今日みたいな、非公式の外出時のお供ってわけ。翡翠様だって人間なもの、公式の時以外外出出来ないなんて耐えられないじゃない」

「はあ。いや、それは分かりますが。何だって、千花の所に」

「女だから、よ」

「……はあ？」

「折角の外出、いくら安全の為とは言え、むさ苦しい男に囲まれてたら伸ばせる羽だって伸ばせないじゃない。だから、あたしの所に話が来たってわけ」

「……はあ」

分かったような、分からなかったような。

そんな兄の複雑な気持ちを知ってか知らずか千花は、何処と無く誇らしげな顔をして追加の餡蜜を突付いている。

「……でも、危険じゃないですか。さっきのような事が、よくあるのでしょうか？」

「もう、慣れちゃった。案外、骨の無いヤツばかりなのよねー」

「な、慣れたって、そんな」

——でも強いぜ、あの子。

雷封の台詞が思い出される。彼がそう言う程なのだから、妹の剣の腕は相当なものなのだろう。いくら雷封でも、あの場面で嘔吐出来ないと思いたい。

だけど、いくら強いと言ったって。

「だって、慣れるしか無いじゃない。引き受けちゃったんだし」

「簡単に言いますねえ」

「難しく言ったってしょうが無いじゃない。誰かが守ってくれるわけじゃなし。あたしが、翡翠様を守ってあげなきゃならないんだから」

それとも。

兄様が、守ってくれる——？

妹が本気で口にしたわけでは無い事ぐらい、草雲にも分かっていました。それでも、そんな事を言われてしまつと流石に黙ってははいられない。

「そ、そりゃあ！ 私だつて、千花が危ないとなつたら何としてでも守りますよ！ 命を賭けてでも、守ってみせます！」

「あたしは、命なんて賭けてもらいたくないわ」

冷めた口調で、珍しく大きな声を出して宣言した草雲をあつさり
と撃沈させる一言を放つ。

「命なんて賭けてもらつたつて、嬉しい事なんて何も無いもの。そんなものを賭けないとどうにも出来ないのだつたら、守つてなんて欲しくないわ」

「あ、いや、命を賭けてでもというのはホラ、それぐらい大事だつて事で……。ホントに賭けるわけでは……」

「……分かつてるわよ、そんな事」

しどろもどろになりながら弁解をする兄を冷ややかに見つめ。ただ、例え話でも嫌いなもの、とぼつりと言つた。

その時の千花の表情が、草雲の脳裏に焼きついて離れない。

怒っている様に、少しむくれた顔をしながら。

それでいて少しだけ、泣き出しそう。

少女と大人の狭間で揺れる、複雑で繊細な表情。

そんな妹の顔を、初めて草雲は見た。

——嗚呼。

一寸見ないうちに千花も、大人になつたんですねえ。

そんな事をほんのりと思いながらも、でも追加の団子は止めておいた方が良いでしょうと一言余計な事を口走り。

——ぱしーん。

何処までも青く晴れ渡つた秋空に、乾いた張り手の音がよく響き渡つたのだつた。

言葉を交わす事無く、二人は黙々と表通りを歩いていた。

少し遅れて歩く雷封の顔には何の表情も浮かんでいないが、彼が時折見せる触れたら凍ってしまいそうに研ぎ澄まされた冷たさも伴ってはいない。やる気が無いのか虫の居所が悪いのか。極力、真光寺翡翠を見ないようにしながら、押し黙って後をついて歩いているのである。つまり、目が見えないはずの翡翠が赤毛の青年を案内する形になっているのだが、そんな事とは全く知らぬ人間が見ても、彼女の淡い翠色の瞳が何も映さないのだなどと感付く者は居ないだろうと思える程、翡翠の歩みは自然で危なげが無い。

ふと、先を歩く翡翠が足を止め、雷封を振り返る。それもまた、彼女が光を失っているなどとは微塵も感じさせない自然な動作だった。

「少し、寄りたい所があるのです。寄り道しても、構いませんか？」
「別に俺は、あんたを送って行ってくれと頼まれただけだ。寄り道しようがどうしようが、最終的に真光寺に辿り着けりゃア構わねエよ」

好きにしてくれ。

投げ遣りにそう言う雷封は、すぐに翡翠から目を逸らした。

いい加減な肯定ではあったが、返事は返事である。儚げな季球の巫女は、ではお言葉に甘えますねと言い、確りとした足取りで再び歩き始めた。

何処をどう歩いたのか。

それはまるで、魔法のように現れた。

見渡す限りの、花の平原。

鮮やかに、穏やかな。

色とりどりに咲き誇る、優しい絨毯。

それを目の当りにし、流石の雷封も短く息を呑んだ。

然程、遠くまで歩いた覚えは無い。それほど複雑な道を通った覚えも無い。それこそ、寄り道で済んでしまう程度の道程だったはずだ。それなのに、彼はこの場所を見た事が無かった。

これだけ広い秋桜の絨毯が首都の近くにあるのなら、知っただけでおかしくは無いはずなのに。

ここは、まるで。

「——綺麗でしょう」

美しい巫女の静かな声で、はっと我に返る。翡翠はしゃがみ込み、慈しむようにその花びらを撫でていた。

「まだ目が見えた頃——大好きだった場所です」

言って、花の平原をゆつくりと見回した。彼女の瞳には、昔と同じ景色が映っているのだろうと雷封は思う。

「子供の頃、偶然ここに迷いこんだの。どうやって辿り着いたのか、今でも覚えていません。ただいつも、目を瞑ると不思議とここに辿り着く事が出来たのです。それは、今でも変わらないわ」

私にはもう、記憶の中でしかこの景色を見る事は出来ないけれど、さわさわと、花卉が優しく揺れた。

「……大好きな景色と引き換えに、国の行く末を視る力を手に入れたんだろ。全く、皮肉なモンじゃねエか」

「それが私の、真光寺に生まれた者の宿命ですから」

「宿命ねエ。全く以って、安直な理由だな」

全てを否定するような、強い響きを持った台詞だった。周りに纏わり付かせているのは、深い嫌悪感や突き刺さるように鋭い敵意。

「貴方は、私の何を知っているのです」

静かに立ち上がり、真正面から雷封を見据える。

「もちろん、私の名前、私の役割を知っている人は沢山います。それ故、先程のような事も少なくはありません。善意であれ悪意であれ、私の周りには色々な人間が集まって来るのです。憧憬の瞳を持つて見る者、畏怖の念を持つて避ける者。本当に、沢山の人達が」

雷封は、ただ押し黙って翡翠の言葉を聞いていた。

「だけど貴方は、誰とも違う。私に敵意を持っているのに、私を守ろうとしてくれている。何故です？ 私は貴方の事を知らないけれど——貴方は、私の事を知っているのではないですか？」

儚いが底の見えぬ淡い光を湛えた翠の瞳と、暗く鋭い光を宿した深い赤の瞳。互いの視線がぶつかり合い、一瞬だけ絡み合う。

「何も、特別な事は知っちゃいねエ。あんたは神託を授かる真光寺の巫女で、この季球にとって無くちゃならねエ存在。季球に住んでるヤツなら子供でも知ってるその程度の事しか知らねエし、興味もねエ」

ただ。

一際冷たい風が、二人の間を吹き抜けて行く。

——ただ。

「俺は——生まれた時から、あんたが嫌いなんだ」
ちりんと。

風に吹かれて、小さな鈴の音が鳴った。

よりもよって。

花街、ですか。

妹と別れ、雷封に渡された紙を頼りに訪れた場所。それは、表通りから一本外れた裏道にある、草雲のような朴念仁とは一番縁遠い場所だと思っていたような類の場所だった。真面目とか意気地が無いというのか。どちらにせよ、金で一夜限りでも夢を買いたいなどと考えた事の無い人間には無縁の場所であるという事は確かである。

無縁の場所であるから、こんな所に夜の街が存在していたという事すら知らなかったのである。そんなわけで、やって来たのは良いものの足を踏み入れるか否か、まだ活気付いていない夕闇に包まれかけた通りの前で、見なかった振りをして帰ろうかどうかどうしようかぐ

だぐだと迷っているわけである。ハタから見れば、夕方こんな場所の入り口で腕を組みつつ、情けない顔をしてぶつぶつと何事か呟きながら行ったり来たりしている男の図は十分怪しいのだが、彼の頭の中では帰ろうかと意見している大多数常識派の草雲と、でもこんな所で自分に用がある人物とは一体どんな人間なんだろうと少なからず相手に興味を持っている少数派で本音の草雲とがあーでも無いこーでも無いと激しい論議の真っ最中である。そんな真つ当な事に気が付く余裕は何処にも無いらしい。

全く、酷いですよ雷封さん。

自分の所為で、一人で訪れる羽目になったのだという事実はこの際都合良く忘れる事にして、心中一人ごちる。

行き先が花街なら花街だと、一言ぐらい言っておいてくれたって良いじゃないですか。

雷封さんと違って、こういった場所に免疫が無い事ぐらい、言わなくたって察しが付くでしょうに。

ぶつぶつとぼやきつつ、でも雷封と夜の街というのもどうにも想像が付かないな、と不思議に思い首を傾げた。

想像は付かないけれど、可能性が無いとも言切れない。少なくとも自分よりはずっと可能性がある。何にせよ、ここで誰かが待っている事だけは確かなのだが、わざわざここを指定するという時点で何だか無駄に勘ぐってしまいたくなる。

——うん。

用事、ですから。

このままでは、あまりにも埒が明かない。

取りとめも無い方向へと突っ走り始めた思考を強引に引き戻し、まだ頭の中で会議が続けている沢山の草雲達を用事という二文字で有無を言わさず黙らせる。それでも意見を言いたそうな表面上常識派の草雲が居たら、一発殴りつけてでも黙らせるぞと強いんだか弱いんだかよく分からない決意を固め、まるで根っこが生えたかのように地面にくっついて剥がれない自分の右足を持ち上げる事に成功

する。

……用事、ですから。

ふと、先程まで会っていた妹の顔が浮かんだ。結局さつきは一度も見る事が出来なかった満面の笑みに言いようの無い恐ろしさを感じつつ、彼はやっと目的の場所に足を踏み入れる。

ふわり、と甘い香りが鼻孔をくすぐる。

それは媚薬にも似た、快樂の香り。

ぞわり、と全身に震えが走った。

——用事、ですから。

再三自分に言い聞かせ。いつの間にやら灯が入れられ、活気付いて来た退廃的に華やかな夜の街を小さくなりながら早足で歩く。

鮮やかな朱が、鮮烈な影を落とす着物が、酷く目に痛い。

兄さん兄さんと声を掛けて来る遊女達を急ぎ足でやり過ごし、ちらちらと店の中へと遠慮がちに視線を送ってみたりしながら、どうにも恐ろしい事に気が付いてしまった。

……一体、どの店にいるんでしょう。

すうっと、身体中の血液が一気に凍ってしまったような冷たい感覚。代わりに身体を駆け巡ったのは、嫌な予感というあまり友達にはなりたくない類の感覚だった。

心から祈る思いで、渡された紙を懷から取り出す。

それを上から下から表も裏も、はたまた透かして見たりして、一字一句穴が開く程凝視した。

「……か、書いてないじゃないですか……ッ！」

思わず、声を上げてしまった。一気に注目を集めたのにも気が付かず、小さな紙を勢いで破り捨てる。

「何ですか、いじめですか。いじめですね。わざとですか。わざとですよねッ！」

紙吹雪どころか粉雪である。どうやら彼の頭の中では、雷封が書き忘れたという至極尤もな選択肢は排除されているらしい。だが確かに、真光寺翡翠を成り行きで送る羽目になってしまった雷封がせ

めてもの腹いせにと、こうなる事を見越して故意に書かなかったわけであるから、悲しいかな草雲の予想は当たっている事になる。当たっていても、何も嬉しい事など無い辺りが更に哀愁を誘う。

破り捨てた小さな紙をこれでもかという程派手に踏みつけて、はあああつと心の奥深い所からの深い深いため息を吐き。

……馬鹿らしい。
帰ろう。

そう決めて。動くのも億劫な程どつと疲れた身体を引きずって、回れ右をした時だった。

「先生エ。どなたか、お捜しかい？」

頭上から掛かった、艶のある声。

思わずつられて、ふらりと見上げる。

女が一人。煙管の煙を燦らせ、二階の窓から面白そうにこちらを見下ろしている。

「あ、いえ……」

全く答えにならない声が出た。女はそれを聞き、にいつと紅い唇を吊り上げる。

それは、美しいのだけれどどうにも心をざわつかせる笑みで――。

「あんたが捜してるのは、椿白零。そうじゃアないのかい？」

「ど、どうしてお分かりで!？」

女は目を細め、くくつと肩で笑った。

「どうしても何も。あんた、あたしが先生って呼んだ事に疑問を持つてなかったのかい」

「……あ」

頭上の相手をマジマジと見つめ、じゃあ、と続けた草雲を見下ろしながらもう一度、今度は声を上げて笑い。

「全く、鈍いお人だねエ。そう、あたしが椿白零さ」

「わ、分かっていたなら。もっと早くに声を掛けてくれれば良かったじゃないですか。私は、一体どうやって貴女を捜せば良いのかと」「あたしだって、先生の資格を知っていたわけじゃア無いからね。」

ただ、先生があまりにもこの場所からはみ出してるモンだから、こりゃア種田草雲ってエ物書きの先生は十中八九このお人の事だろうと――見当を付けただけの事さね」

「……そんなに、はみ出して見えますか」

「そりゃアもう、これ以上無いぐらいにね。こんなところに顔を出すにしちゃア、先生は真つ当過ぎるのさ」

さ、これ以上の立ち話もなんだよ、と椿は続け。

「遠慮しないで上がつといで。別に、獲って食やしないよ」
尤も。

いつまでも馬鹿みたいに通りの真ん中で突っ立ってたりしたら、一体いつ獲って食われるか分かったもんじゃないけどさ、というぼやきが聞こえるや否や。

草雲は、慌てて椿の居る店の中へと飛び込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3032b/>

季球妖物語

2010年10月13日12時36分発行